Tokuyama College of Technology

徳山高専だより

No.55
2002年9月

インターアクトクラブ韓国訪問記 P.18
専攻科中四国交流会 P.19
情報電子工学科3年生合宿研修 P.21
専攻科インターンシップ P.22
オーストラリア語学研修 P.23
留学生日本雑感 P.25
合格おめでとう P.26

保健室・学生相談室の紹介 P.27
卒業生紹介・私の研究 P.29
街角ウォッチング P.31
匠塾 P.33
留学生・編入生の紹介 P.34
新任教職員紹介 P.35
トピックス・アングル・編集後記 P.38

特集1 がんばれ1年生 上級生からの提言 P.1
特集2 校長インタビュー 情熱のない人生は生きる価値なし P.5
特集3 フレッシュ座談会 世界に認められるオンリーワンを目指して P.9

特集1 がんばれ1年生

新入生合宿研修を終えて

１年３組
森下　瑠璃子

徳山高専に入学して３日目の４月11日、私たち一年生123名は新入生合宿研修のため山口徳地少年自然の家へやってきました。

到着するとすぐ入所式やクラス別自己紹介などがありましたが、最初は周りの人がみんな知らない人ばかり、しかもクラスの４分の３が男子ということで、「これから２日間大丈夫かな。もし誰とも話せなかったらどうしよう。」と不安で一杯でした。でも、オリエンテーリングや夕べの集いなどみんなと一緒の時間を過ごす内にだんだん慣れてきて、色々な人と話せるようになりました。特に夜のレクレーションでやったクラス別の長縄飛び、やっている内にみんな上着や靴を脱ぎ出し、必死になって縄跳び回数、人数の記録に挑戦！という感じになってきて、先生も一緒にクラスが一つになっていました。失敗してもみんな明るく笑ってくれたので本当に楽しかったし、クラスの団結力が感じられてとても嬉しかったです。

２日目は朝から野外炊飯をして楽しみました。薪で火を焚くのに苦労しながら、煙の中でみんなが協力して作った昼食のカレーは格別おいしかったです。

そして私が今回の合宿で一番印象に残っているのが２日目の午後にあった「僕の夢、私の夢」という作文の発表会です。それぞれ班の代表の人が前に出て作文を読みました。建築士になって自分の設計した家に住みたいという人や、公務員やプログラマーになりたい人、ソフトウェアの開発技術者になりたい人、自分の会社を作りたい人、新しい車やロボットを開発したい人、そのために海外に留学したい人など、みんな自分の夢をしっかり持っていて、その夢を叶えるために高専で勉強していきたいということだったので、「みんなすごいんだな」と本当に驚きました。私はというと、一応建築関係の仕事に就きたいという希望はありますが、今は合宿から１ヶ月以上が経ち、高専での生活にもだいぶ慣れてきました。専門や数学、物理など難しいことやうまくいかないことなどがあると、「もうだめだ！もしかしたら向いてなかったのかもしれない」と不安に思うこともありますが、合宿で受けた刺激を励みにこれから５年間、頑張っていこうと思います。

また、徳山高専の教育目標でもある「世界に通用する開発型技術者」になるためにも、勉強だけでなく、多くの先生方や友達など色々な人との出会いを大切にし、人間的にも成長していきたいと思います。

私　の　抱　負

機械電気工学科１年
福田　　瞳

こんにちは。本年度機械電気工学科に入学しました福田瞳です。この度は徳山高専だよりの１年生特集ということで私の本校までの通学について書かせていただきたいと思います。私は毎朝８時頃に家を出て、自転車で本校まで通っています。高専に入学した次の日も、自転車で通学したのですが、そのときの感想は「なんだ、たいしたことないじゃん」というものでした。しかしそれから２日後、朝起きて体を動かすと痛く、筋肉痛になっていたことに気づきました。やはり、高専坂は只者ではありませんでした。しかし、今ではずいぶんと慣れ、筋肉痛になることもないのですが、そんな私に最近強敵が現れました。暑さです。この時期、何もしなくても汗が出てきてしまいます。そんな中、朝っぱらからあの高専坂を登っているわけです。教室につくととても暑く、うちわであおぎまくってる自分がいます。冬はまた風も強く、寒いことだろうと思っています。しかし、暑さ、寒さに負けずこれから５年間自転車通学をがんばります。

情報電子工学科１年
土橋　　塁

今年の４月、僕はこの徳山高専に入学してきました。高専に入学してからは、いろいろなことが変わりましたが、その中でも大きな変化は授業が90分になったことだと思います。今は少し慣れてきましたが、最初の頃はとても大変でした。中学の頃よりも40分も長くなったので、時間的に倍くらいになったことになります。だから、とても疲れてしまっていろいろな授業で眠たくなってしまいました。授業に集中しつつ、眠らないようにするのですが、午後はほぼすべての授業でそうでした。ほかにもたくさんのことが変わりました。友達のことや勉強の難しさ、授業の進む速さなど、挙げたらきりがありません。ですが、高専での生活に１日も早く慣れて、いろいろなことを勉強したいと思っています。中間試験が終わりましたが、これから卒業するまで、変わらずがんばっていこうと思います。

土木建築工学科１年
赤松　　透

入学してから３ヶ月はほんとうにあっという間でした。最初のうちは慣れないことも多くいろいろ大変でしたが、今はずいぶんと学校生活にも溶け込み、90分授業や部活動にもかなり慣れました。テストも終わりもうすぐ夏休みですが、とりあえずこの夏休みは部活動に励みたいと思っています。僕はいま陸上部の長距離をやっていますが、夏の暑さははっきり言ってきついです。しかし頑張ってきつい練習にも耐え、自己ベストの更新をできる限り狙っていきたいです。あと勉強の方は適度にコツコツやって、やった内容をできる限り忘れないようにしたいです。まだ高専に入って３ヶ月、これから先はまだまだ長いので、気を長く持っていこうと思っています。

上級生からの提言

高専生活を意味あるものにするために

機械電気工学科３年
中田　　透

高専生活を有意義に過ごすためには、何に対しても無関心にならず、色々なことに興味を持って挑戦していくことが重要だと思います。

僕は今メカトロニクス部に入ってロボコンで活動していますが、始めたきっかけはやはりロボコンに興味を持ったからです。活動が始まると非常に忙しく、大変ではありますが充実した生活であることは間違いありません。

別に興味の対象が高専や学校の授業に関連したことである必要はないと思います。関連したことであれば活動する機会が増えるというだけで、大切なのは何に興味を持つかではなくて自分が興味を持ったことに対して真剣に取り組んでいく姿勢です。

高専は他の高校と違って５年制で、時間的にも余裕はあるし選択の幅も広いので、様々なことに挑戦して自分の能力を成長させていく中で、自分が将来本当にやっていきたいことを見つけることが出来れば、充実した高専生活が送れるのではないかと思います。

高専生だからできる事を

情報電子工学科４年
有熊　　威

私は入学当初から「ハードウェア系に進学する」という、専攻と進路を決めていたので、高専での５年間をどのように過ごすかは、自然と決まっていったように思います。

まずは進学に関する情報収集からはじめました。教官や先輩に質問して、制度や対策などについて調べ、３年までは専門教科と入試科目（英語・数学・物理・化学など）の勉強を押さえていけば大丈夫だと考えました。具体的には資格試験や実用／工業英検対策や、数学などの問題集をこなしていくことにしました。

進学対策に当てる時間が予想より減少した分、プロコン、学内ロボコンなど、自分の知識を実践する機会に利用できました。また、夏休みを利用した語学研修への参加や、専門分野や科学など、将来必要になりそうなことの勉強に多くの時間を取ることができました。これらのことは大きなアドバンテージになると考えています。

自分から行動していけば、高専からより多くのことを得られると思います。ぜひ、この環境を活用して自分の目標を達成してほしいと思います。

「目の輝き」をもち続けましょう

土木建築工学科５年
深江　　忍

１年生の皆さんが入学されてから３ヶ月ほどが経ちますが、徳山高専での学生生活はいかがでしょうか？始めての前期中間試験を終えて、手元にはたくさんの答案用紙が返されていることと思います。（自分には・・・とても嫌な思い出が蘇ります。）これを踏まえて夏休みに勉強するも良し、部活を頑張るも良し、CAの学生なら長期休暇なので現場でアルバイトをしてみるのも良いでしょう。

これから始まる５年間は15歳から20歳で成人するまでの大切な「学生」としての時間です。そして、卒業するまでには人生の４分の１をこの徳山高専で過ごすのですから、今後の過ごし方は皆さんの将来に大きく影響していくはずです。

今、１年生の目を見てみると、とても輝いています。本当にそう思うのです。これからの５年間、基礎教科を学びつつ専門分野も学んでいくわけですが、高専の勉強だけが全てではないことを決して忘れないでください。情報化、国際化、そしてさまざまな情報が飛び交う現在、私たちは多くの事を知ることができ、また知っておく必要があります。今から４年後の2006年、１年生である皆さんが５年生になったとき、その「目の輝き」をもち続け、更に輝きに磨きをかけておられることを期待します。

一度きり……何かを見つけよう

機械制御工学専攻１年
長廣　一平

ある日の午後の出来事…
「今度の高専だよりの原稿，自分の高専生活についてちょっと書いてくれない？？」
「はぁっ！？何でオレなん？？」
…といったやりとりがあり、今こうして原稿を書いている。自分の生活について書いてと言われても、そんなにたいしたコトなんて書けやしない。ホントに極めて普通で適当な生活であったからだ。このように適当な生活をすると５年間“あっ”という間に終わってしまうヽ(｀Д´)ノ（「えっ，もう！？」みたいな感じで♪♪）。十代後半のこの５年間、一人一人にとって激動の時代になることは言うまでもない。二度とは戻らないこの激動の時代を十分に満喫してほしい。すべてが順風満帆に事が運ぶことは、まずナイと思う。しかし、これに挫けず、勉強、遊び、恋など何でもいいから、自分は５年の間にこれをやったぞ！！と言えるモノをぜひ見つけてもらいたい。それが５年後に自分の自信へと，きっとなることだろう。
v（＾o＾）v

特集 2

校長インタビュー

情熱のない人生は生きる価値なし

天野徹校長（右）
インタビュアー
　大成博文教授（左）

新しく赴任されたフレッシュ校長に直撃インタビュー。かわいくてしかたがない学生、夢は大きく、世界に認められるオンリーワンを目指して、開発教育の真髄はチャレンジ精神。本校の教育目標の実現と地域連携、「情熱のない人生は生きる価値なし」の座右の銘にも力がこもります。

徳山高専の印象

１月に本校に赴任され、４ヶ月が経ちました。赴任当初とは異なる部分もあると思いますので、改めて徳山高専の印象をお聞かせください。

最初に受けた印象と大きくは変わっていません。美しい海と美しい山、そして元気で礼儀正しい学生諸君、「さわやかな学校」、これが私の印象です。

教育畑の仕事は初めてと思われますが、その意味でも新鮮な要素が加わっているのでしょうか。

そうなんです！　実際、教育畑の仕事は初めてですが、これまで自分が経験してきたいろいろなことを、次代を担う若者に伝える非常に良い機会を与えられてすごく幸せです。

先日の会議で、「学生たちがかわいくてたまらない。」と言われていましたが。

昔から子供を見るとついかまってしまったり、若い人と話すことも好きでした。それが自分の勤める学校の学生となれば、かわいさ倍増。彼らの望むこと、彼らのためになることなら、何でもや

りたい気持ちです。生き生きとしている彼らの姿が、自分自身の若い頃と重なっているのかも知れません。

新入生の合宿研修に参加され、新入生と直接交流されましたが、先生からみた新入生の印象はいかがですか。

入学式のときは、少しおとなしい優等生という印象でしたが、合宿で直接話をしてみると、勉強やクラブ活動に一生懸命取り組もうという強い意気込みを持つ若者達だということがわかり、うれしくなりました。

お揃いのジャージを買ってしまいましたし、たぶん私と一番長く付き合う学生となるでしょうから、彼らの成長と将来をしっかり見届けたいと思っています。

オンリーワンを目指して

高専をめぐる状況はますます厳しくなってきています。先日の会議で、本校の教育目標を踏まえて、「世界に認められるオンリーワンを目指して」という構想を示されましたが、この真意をお聞かせください。

価値観が多様化し、また活動の場が世界中に広がっています。そういう中で、力強く生きていくためには、個人にしろ組織にしろ、アピールできる強い個性を持つことが大切になってきていると思います。

ですから、学生諸君に強い個性を持っていただきたいわけですが、そのためには学生を育てる教官自身、或いは学校そのものが強い個性を持って世界にアピールできるようになる必要があるという思いで発言しました。

とりわけ、教育においては「開発型教育」、組織に関しては「開発型組織」を強調されていますが。

開発の基本は「チャレンジ精神」にあります。つまり、既存の概念を乗り越えて新しいものを生み出すことだと思います。

教育や組織には、どちらかというと安定が求められるところがあります。一方、開発にはその正反対が求められますので、その調和が大切です。

一般的には物事は放置すると安定に向かいがちなので、心して新しいものに取り組む必要があります。固定概念を捨てて、ほかでできることは自分たちにもできないわけはないということを信じ、組織を挙げて果敢に取り組むというみなさんの姿勢が大切だと思います。

地域連携の強化

もうひとつの強調点は、「地域連携を進める」ことでした。すでに、この問題についての発言も地域に向かってなされているようですが。

高専は地域の中にあるのですから、地域の一員として期待される役割をきちんと果たすことは当然のことです。また、逆に、地域に支えられることによって、高専はその地域に根ざした特色を発揮できるのだと思います。

周南地域には2000以上の企業群が集積しています。本地域の今後の発展や新規産業の創造等を考えると本校の果たすべき役割は小さくないと思いますが、実際に地域の企業を訪問されてみていかがですか。

徳山高専が地域協力を進めることについては、どの企業からも歓迎されていますが、具体的にどう進めるかについては、どの企業においてもやや戸惑いがあるというのが現状ではないかと思います。

今回、地域の企業を訪問させていただく中でいくつかの技術相談を受けており、これらに誠実に応えていくことが重要だと思います。同時に人間的な交流を重ねていく大切さを感じています。

企業訪問の際に、「学外研究室」の提唱をなされ、それが新聞に報じられました。その後の反響も小さくないと聞いていますが、いかがですか。

地域に支えられて発展し、そして地域の発展に貢献できる徳山高専。これを最も端的に具現化したものが、学外研究室だと考えています。

地域には教育・研究に利用できる施設・設備、さらに経験豊かな人材といった資源がたくさんあります。学生を含めた教育・研究の場を学外に出すことによって、そのような資産を有効に活用すると同時に、実際の現場の課題に即した教育・研究を行うことができます。

他方、地域にとっては、フレッシュな発想や力が新しい事業を生み出す起爆剤となる可

能性がありますし、若い優秀な人材が地域の中に一生の活動の場を見つける契機となることも期待できます。

地域の優秀な人材を地域を挙げて育て、地域の発展につなげたいと思っておられる多くの方々から様々な反応をいただいていますから、遅かれ早かれ実現するものと確信しています。

本校の教育目標

もうひとつの重要なキーワードとして、地域連携と学生の関係が指摘されます。この点についてはいかがでしょうか。

本校の教育目標は、「世界に通用する実践力のある開発型技術者の育成」ですが、この目標の中にある３つのキーワードそれぞれが地域連携の必要性を示唆しています。

「世界に通用する」ためには、自らのアイデンティティが必要です。この徳山、周南の地で培われた感性や問題意識をしっかりと持って、世界に雄飛していって欲しいと思います。

「実践力」を養う最も良い方法は、何と言っても現場に出ることでしょう。現場の中に課題を見つけ、現場の中で考え、現場に知識を適用して初めて身に付くものを大切にしたいと思います。

「開発」の原動力、言い換えればチャレンジの原動力は、その成果が現実のものとなったときに得られるであろう達成感や喜びでしょう。それを体感できる機会を学生に提供することができれば、それ以上の教育はありません。

もちろん、このような教育における地域連携が効果的に行われるためには、本校の教育目標を達成するためのシナリオを明確に描き、地域の関係者の方々の理解を得ることが大切であることは言うまでもありません。

青年時代

話は変わりますが、高専生と同じ15歳の頃はどんな若者でしたか。

よく食べていましたね。１日６食が普通でした。朝しっかり食べて、10時ごろに二段重ねの弁当、昼には食堂でうどん、帰り道に餃子、夕食を人並みに食べ、夜食にラーメンが日課でした。不思議なもので、あのころは食べても、食べても太りませんでした。母親が、「臭くてたまらないから、帰りに餃子を食べるのだけはやめとくれ」とよく言っていました（笑）。

また、何にでも関心があってどこにでも出没する若者でした。その傾向は今でも変わりませんが（笑）。バンド、ダンス、合ハイ、合コン、それに学生運動も。結構パワフルな「今時の学生」でした。ユースホステルと普通電車を利用して貧乏旅行にもよく出かけました。でも外国に行く勇気はありませんでした。何と言っても高所恐怖症ですから（笑）。

本を読むのも好きで片端からなんでも読んでいました。当時読んだ本で特に印象深かったのは、山本周五郎の全集と「チボー家の人々」でしょうか。

東京大学では電気工学を専攻されていますが、その動機は？

本当は新聞記者になろうと思っていました。ですから文系も考えたのですが、何か専門的なことをバックに持っていたいと考えて理系に進学しました。

電気工学を選んだのは非常に単純で、電子回路の理論が面白そうだと思ったことです。自然現象だけでなく経済なども含めた世の中の色んな現象を表現できそうに思えたのです。

それまで、ハンダゴテを持ったこともなかったし、テレビの裏側を覗いたこともありませんでした。結局、まともなハンダ付けもできずに卒業し、電気製品が壊れても隣のおばさんの方が役に立つといつも言われています（笑）。

赴任前の仕事

徳山高専に赴任される前に、わが国における重要な科学技術政策に携わられてきておられますが、今振り返るといかがですか。

レーザー、加速器、核融合などの研究開発プロジェクトのマネージメントを担当して、世界の最先端の研究者の方々と仕事ができたこと、農林水産省で全く専門違いのプロジェクトを、用語や時

間感覚の違いにとまどいながらまとめたこと、通産省で国際標準の仕事で世界を飛び回ったことなど印象深い仕事でした。原子力関係の仕事では、米国、ソ連、日本の３つの事故を経験し、結構大変な思いもしました。昭和天皇の大葬の礼の時、大臣秘書官をしていて昭和から平成に変わる現場を体感できたことも良い経験でした。

しかし、今振り返ってみますと、正直言って今が一番楽しく、昔の仕事は霞んでしまっています。今の仕事のために、これまでがあったんだというのが、現在の実感です。

趣味と座右の銘

趣味は？　トランプですか？

はい、コントラクトブリッジです。趣味というより、「第２の職業」と言った方がよいかもしれません。コントラクトブリッジを広めるのは、私の使命みたいに思っていますから、趣味でありミッションであるという感じです。

昼休み、談話室で学生とトランプ

どんなところが面白いのですか？

まあ、やってみていただいて（笑）！　口で言うよりもやってみていただく方がよいですね。私の知る限り、２、３ヶ月やって止めた人は今までに一人もいないですね。推理力、イマジネーション、人間関係などの要素が総合化された世界一面白いゲームです。

もうどのくらい続けられているのですか？

もう30年近く。本格的に始めたのは役所に入ってからです。

好きな食べ物は？

もともとは血のしたたるようなステーキが好きでしたが、徳山に来てからは魚がおいしいので、もっぱら魚を食べています。

座右の銘を教えてください。

「情熱のない人生は生きる価値なし」です。

最後に、本校の学生にメッセージをお願いします。

私も50歳になって、今まで以上に学ぶことはできないかも知れませんが、学生諸君をみていると、このまま枯れるわけにはいかないと強く思わされます。

若いということは大きい可能性を秘めていると同時に、それだけでまわりに何かパワーを与える力があります。若いということの力を信じて、それぞれの夢に向かってまっしぐらに走っていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

（聞き手は土木建築工学科教授　大成博文先生）

天野徹校長略歴

昭和27年３月	愛知県名古屋市生まれ
昭和39年３月	兵庫県神戸市立本山第2小学校卒業
昭和42年３月	埼玉県上尾市立上尾中学校卒業
昭和45年３月	兵庫県私立灘高等学校卒業
昭和49年３月	東京大学工学部電気工学科卒業
昭和49年４月	科学技術庁
昭和52年４月	農林省
昭和57年２月	英国マンチェスター大学
昭和62年６月	科学技術庁原子力局政策企画官
昭和63年７月	同　科学技術振興局研究開発基盤調整官
昭和63年12月	同　長官秘書官
平成元年６月	同　科学技術振興局研究開発基盤調整官
平成２年６月	動力炉･核燃料開発事業団担当役（在ワシントン）
平成５年１月	科学技術庁科学技術政策局計画課長
平成７年１月	通産省工業技術院材料規格課長
平成８年６月	理化学研究所参事（在播磨研究所）
平成10年６月	航空宇宙技術研究所管理部長
平成11年７月	科学技術庁原子力局政策課長
平成12年７月	科学技術振興事業団科学技術理解増進部長
平成13年７月	文化庁長官官房審議官
平成14年１月	徳山工業高等専門学校長

特集
3

フレッシュ座談会
世界に認められるオンリーワンを目指して！

出席者

天野　徹（校長）
柏倉知秀（一般科目講師）
兼重明宏（機械電気工学科助教授）
山田健仁（情報電子工学科助教授）
田村隆弘（土木建築工学科助教授）

司　会

大成博文（土木建築工学科教授）

若いということ

司会　フレッシュな校長が来られ、フレッシュな方々に集まっていただいて座談会を行うことになりました。その校長が提唱されている「世界に認められるオンリーワンを目指して！」が、本座談会のテーマです。口火は田村先生からお願いいたします。

田村　天野先生が赴任されたときからの話を聞いて、心豊かで、視野の広い方だなと思っていました。物事に捉われていないところが、すごく共感できます。これまでの高専や組織に捉われてはいけない、優秀な高専が良いわけではない、このような考え方はすごくよいと思います。40歳を過ぎたころからですが、私も座右の銘として、「捉われることなかれ！」を持っています。しかし、これをあまり意識過ぎると、具体性がなくなり、あいまいになりがちな側面も出てきて、この調節が難しくなることもあります。その辺をよくよくコントロールしていただいて、天野先生に具体化をしていただくとよいなと思っています。

司会　最初から、「捉われない高専」、「捉われない校長」という問題が出てきました。また、昨日のインタビューで、学生のみなさんに「若いということはそれだけですばらしいことだ。情熱を持って励んでほしい。」という趣旨のことも言われてい

ますが、天野先生いかがでしょうか。

天野　若いということは可能性を秘めているといいましたが、裏返すと可能性を信じているということは若いこととも言えます。物事はすべてが観えてくるとそれで終わりになります。まだ自分には観えない可能性が存在している、これを信じるかどうかだと思います。徳山高専が若いかどうかも、その可能性を信じ、チャレンジしようという意識をもつかどうかだと思います。

本校の羅針盤

田村　正直に言いまして、これまでは「動かない時代」だったと思います。バブルがはじけて日本全体が危ない状況になり、動きが始まる時期に動かそうとする校長が来られたと思っています。これはタイミングが非常によい話で、羅針盤を定めてしっかり動かしていただきたいと思います。

山田　校長が「チャレンジ精神で既存の概念を乗り越えて先に進もう！」、「教育組織の変革と安定の調和を図る」と述べられていることに注目しています。ただその中で、「一般的に物事は、ほって置いても安定に向かいがちなものですから、心して新しいものに取り組んでいくよう心がけねばならないと思います。」というお話がありました。私は教育組織を安定させることが非常に重要で、それにはかなりの時間と労力が必要だと考えていますし、教育組織はばらばらではなく、ある程度ベクトルをそろえる必要があるように思います。

柏倉　前校長とは１年の短い付き合いで、新校長との比較は難しいのですが、ただ、校長からの情報発信が非常に増えたと思います。今日の社会では、組織におけるリーダーの存在が大きく問われているなかで、徳山高専が具体的にどうなるかを予測することはできませんが、大いに期待されているのではないでしょうか。

兼重　私は、新校長よりももっと新しい存在でして、ずばり、校長のリーダーシップに期待しています。外から見た徳山高専は、創立以来、先発校に「追いつけ追い越せ」で、いろいろと苦労されてきたと思います。その徳山高専も創立30年を迎え、これからどうするかをしっかり考える時期がきているのではないでしょうか。また、その時期にリーダーシップのある校長が着任されたことはとてもタイミングがよいと思います。

人材養成の時代

天野　日本全体が同様で、追いつけ追い越せの時代は、ものがないからそろえろ、やれ設備投資だといってきました。ところが、いざ追い越しものが余ってしまうと、なにかやることの目標を見失ってしまいました。私はこのような時期にこそ人材を育てるべきだと思います。その意味で、今までのことに捉われない、ものに捉われない学校教育が必要であると思います。

田村　今、校長が言われたことは、長岡の「米百俵」の話だと思います。苦しいときだからこそ、教育にお金をつぎ込むという話が「米百俵」だと思いますが、今それを当てはめてみますと、単に大学の数を増やすということではなく、「いかに質を高めるか」ということがキーワードになってくるのではないでしょうか。

山田　日本全体をみると、これまでは、そこそこ人材は育ってきたのではないかと思います。徳山高専の卒業生の声や評価を聞いても、それで十分とはいえませんが、かなりのものは得られていると思います。それでは次にどうするか、ここが難しいところです。私は45歳になりましたが、明らかに今の学生とは価値観や時代意識がかなり違ってきており、それをどうするかでいろいろと悩んでいます。振り返ってみますと、私自身は異なった価値観を持っている口当たりの悪い人たちから貴重なものを教えられ、ハングリー精神を植えつけられた記憶があります。ですから、それを考えたうえで、今の学生にどう接したらよいのか、悩んでいるところです。

司会　これは非常に難しい問題で、もともとハングリー精神がない学生にどう向き合ったらよいかという問題ですが、天野校長いかがですか。

天野　私の経験で言いますと、厳しく言われてがんばったときと、楽しく仕事をしたときがありますが、かなりきつくてもがんばれたのは、楽しいときがあったからで、むしろ、バランスが大切ではないかと思います。また学生については、どう教えたかではなく、かれらがどう学習したか、その学習した量の方が問題だと思います。学生が何を得たのかを明らかにすることが必要だと思いますね。

司会　教育成果を可視化するということですね。

柏倉　１年間教えてみると、学生に非常に幅があ

兼重先生

ると思います。よく勉強する学生は自分でどんどん勉強するし、部活動をしっかりやる学生もいる。ところが、目的がなく単位もすれすれの学生がいます。これらのことを考えると、最低限どこまで学力を持って卒業すればよいのかということを考えてしまいます。

司会　**それは何年生のことですか。**

柏倉　昨年担当した４年生のことです。

動機付け教育

兼重　私はこれまで教育に携わってきて、大切なことの一つは、「動機付け」だと思います。動機付けができていれば、学生は何事も自分のものにしていくのではないでしょうか。その動機付けができていないで、カリキュラムを押し付けるのは難しいと思います。これは高専に限らず、教育の普遍的な課題と思われます。そこで、何時どの様に動機付け教育を行うかですが、それは教育カリキュラムだけではなかなか難しいのかなと思っています。徳山高専では動機付けのための教育を行うということを、予め明確にしておくことも一つの方法ではないでしょうか。

司会　**動機付け教育の達人の田村先生いかがですか。**

田村　長年、野球の指導を行ってきましたが、究極の目標はいかに練習をしないで楽しく優勝するかということですが、なかなかそうはいかないですね。楽しくてしかたがなかったという学校は、後から振り返るとよい学校ではなく、厳しくて辛かったという学校のほうがよい学校だと言われることがあります。スポーツの場合は動機付けが比較的容易で、目の前に敵がいますから戦いやすいのですが、教育の場合はなかなかそうはいきません。そこで、ひとりひとりに可能な限りアクセスして目の前の動機付けを行うことが大切ですね。

山田　最近、４、５年の担任をして、あたり前のことですが、動機付けについては、人それぞれで異なり、また動機付けとなる適切な時期もそれぞれ異なるのだと考えています。就職試験を１回受けてくると学生の顔が変わります。しかし、その疑似体験を学校で練習しても顔は変わらない。ひとりひとりに、しかも適切な時期にその学生に合った指導が大切であり、動機付けは大きな土台として作り上げ、その土台の上で適切な時期に指導を行う、この２つが重要と思われます。

天野　動機付けには２つがあると思います。ひとつは将来の絵を描いて見せることによる動機付けであり、「卒業したらこうなります」、「こういう学力を持てます」ということを明確に示すことです。もうひとつは、動機付けの機会を作ることです。先ほどの就職の問題で顔が変わったということは、本物に触れたということではないでしょうか。学校では疑似体験が多いのですが、できるだけ学生には本物を体験する機会を与えることが大切ではないでしょうか。

田村　徳山高専に入れば「就職がいい」ということは中学生の保護者に浸透していると思います。よく、「あいかわらず、就職いいですか」と聞かれることが多く、「ああ、いいですよ」と答えておけばよいわけですよ（笑い）。問題は、その次の段階にあり、５年間で何をするかを明確にすることが大切です。非常に力を持った学生が入っているのですが、なかには力を眠らせてしまう学生もいます。

教育目標の具体化

兼重　校長が言われているように、「世界が認めるオンリーワン」を目指すのであれば、高専に入って何ができるのかが明確になっていないといけないと思います。確かに、「世界に通用する実践力ある開発型技術者を目指す人材に育成」という教育目標はありますが、それは言葉だけになりがちですので、具体的に高専に入ったら「何ができる」、「こうするんだ」ということを中学生に明確に示すことが重要と思います。最終的には、就職がよい、大学進学率がよいということもありますが、しかし、その間の中身が一番問われている

のではないでしょうか。

司会　動機付け教育から教育目標の中身の具体化という内容の議論になり、いよいよ佳境に入りつつあるというところですが、いろいろな具体的提案を含めてさらに討論を発展させたいと思います。

兼重　ひとつは「シーズ」の問題、学校がきちんと具体的方針を打ち出し情報発信していくこと、もうひとつは「ニーズ」の問題であり、市場調査を詳しく行うことだと思います。地域や中学生が徳山高専に何を求めているか、これを明らかにすることが必要ではないでしょうか。理想論だけで突っ走ってもだめで、具体的に地域や中学生の要望に応えることが優先されると思います。

司会　シーズとニーズの具体化の問題ですが。

兼重　これまで入学生に対しての調査は行われているのでしょうか。彼らは、入ったあとに気がついたこと「こんな先生がいたよ」、「高専のクラブ活動はこうだよ」というようなことを、中学校に行ってすぐ話すようです。

田村　じつは、昨日教務の関係で中学校に行ってきましたが、先生はうちの卒業生から徳山高専のことをよく聞いていますとおっしゃられていました。

天野　徳山高専に赴任する前に、本校のホームページを見たら、新入生から見た徳山高専のページがありました。あれは、なかなか参考になりました。

司会　最近、ある高専で１年生の成績と４年生の成績がまったく相関しているということが報告されています。これは、１年生でうまくいけば、４年生までうまくいくという結果でして、このようなことを含めて、兼重先生がいわれているように克明な調査を積み重ねていくことが大切なように思われます。

技術者教育認定問題

田村　それと、彼らが知らず知らずに目覚めるといいますか、そのようなカリキュラムが重要と思われます。最近、技術者教育認定（JABEE）のことを勉強していますが、我々はJABEEの認定を受けるためにカリキュラムを考えるのではなく、徳山高専という高等工学系教育機関として最も教育効果が上がると思われる教育内容を考え出し、これが結果としてJABEEにも通用するということであればよいのではないかと思っています。もちろん、JABEEの基準と比較して行く過程において、我々の気づかない不足したところがあれば改善を検討すれば良いとも思います。

山田　私も同意見です。私が所属する情報処理学会でもカリキュラムの検討が常に行われ、私の所属する学科でもそれを参考にしていますが、それらを踏まえるとJABEE自身は必ずしもニーズを十分つかんではいないように思えます。つまり、JABEEの目的が現状では必ずしも教育の改善を目指したものになっておらず、また、技術者に対するニーズも各産業分野毎に異なっていることを十分認識していない、もしくは無視しているように思えます。

田村　ですから、JABEEの枠にはまってしまうというか、JABEEに通りさえすればよいといういわゆる狭い了見で考えるととんでもないことになると思います。

柏倉　卒業生に関する調査は行われているのでしょうか。こういうことをしてほしかった、こういうことを身に付けておけばよかった、ということが大切と思われますが。

田村　何年か前にありますね。

司会　小田宮先生が自己評価委員会で調査された結果があります。あれは徳山高専よりも全国に影響を与えたという調査結果ですが、全国的に有名になりました。

柏倉　それは今でも残っているのですか。

司会　ほかにも貴重な調査結果があるのですが、それを生かすのはなかなか大変な問題ですが。

天野　そうですね。組織をあげて取り組めるようになるとよいのですが。いずれにしても、これまでのいろいろな調査結果を勉強して参考にさせていただきたいと思っていますし、そのなかで少し

柏倉先生

でも実現できることがあれば、これからみなさんに投げかけていきたいと思います。

夢とロマン

司会　さて、校長が示されている「キーワード」として、「夢と果敢さ」、「課題を把握する感性、創造性」という用語があります。これは、徳山高専全体にも当てはまる課題ですが､いかがでしょうか。

田村　ソフトとハードがあって、それぞれに短期、中期、長期の具体的計画が必要ですね。大方針は校長から示されていますので、具体的なカリキュラムをどうするか、それからハード面、キャンパスプランの検討も必要と思います。昔、高専祭で、竹を使ってプラネタリウムを作る話があって、最初、計画は10mの高さのものを作る計画でしたが、最終的には小さくなって、いわゆる「掘っ立て小屋」みたいなものができあがりました。一生懸命発光ダイオードを貼り付けて完成したのですが、観客数がすばらしく、長蛇の列ができました。これはすごいと私も見に行きましたが、ハードはぼろぼろでもソフトがよかったんですね。これはと思い、次の年は、鉄骨のアーチ構造で骨組みを作りました。ハードは完璧になりましたが、実はソフトは前の年と同じであったため、中の空間が広すぎて閑散としてしまいました。前の年は狭くてぎゅうぎゅう詰めでしたが、そのほうがよかったんですね。観客が「感動した」と口々に言っていました。その中身と外の関係、ハードが寂しくても、ソフトのほうで夢とロマンを与えることができるということを身をもって経験しました。

司会　今の話は、大学と高専を比較して、高専は小さくてもよいから・・・。

天野　光るものがある。

司会　そうですよね。そういうものと置き換えられますね。そういうものを創らないと、高専は光らないという象徴的な話ですよね！

田村先生

山田先生

山田　高専の場合は、大学と比較してリソースが格段に小さいので、なにかやるとなると、それに集中することが大事ではないかと思います。一方、無駄の部分もあり、自然と中長期的な計画ができにくくなっているという現実があり、これらの改善が必要と思います。夢を実現するためには、長期的な展望が大切であり、それに基づいてリソースを配分することも必要ではないでしょうか。

中長期的ビジョンと活性化

柏倉　中長期的視野から物事を考えるとなると、徳山高専の先生方は、忙しすぎるのではないかと思います。
日々の課題で精一杯となり、そのような環境で果たして中長期的なことを考えられるのだろうかという疑問が湧いてきますが。

田村　私は忙しさはいいんだと思います。ただ、中長期的ビジョンがあればの話ですが。それがあれば、会議が多くてもいいんですけど。しかし、現実は、なんとなく違うなと、会議に出るたびに思いますが(笑い)。もっと本質的なところを議論しようよ、という思いはありますね。

司会　中長期的ビジョンをしっかりつくる、これは将来計画委員会の仕事ですね。それから、高専に光るものをつくる、新たなリソースを確保する、これらはある意味で天野先生の仕事でもあるわけですが。

天野　リソースを獲得することは私の仕事です。あらゆる努力をしたいと思います。また、学生やみなさんが活躍できる場を可能な限り増やし、世の中の人に見てもらうことも大切です。みなさん

に見てもらえば、サポートも増えますし、そのサポートを得て光るものをどんどん創り世に出す。そうすれば、さらにサポートが増えてというように、上昇型のスパイラルにしていきたいと思います。

柏倉　学校全体の活性化ということを考えたとき、その目的に沿ったグループがいくつもあり、いわゆる「引き出し」がいくつもあり、それが活発に動いているという方が自然ではないでしょうか。クラブ活動、教育、研究などで、いくつも盛り上がるものがあるというのが理想ではないでしょうか。

田村　それをするには先生が忙しすぎるということもありますが（笑い）。

山田　学科の中でも、活性化のためのよい意見がでるのですが、その時に、ちょっと待ってください、だれがリーダーシップを発揮してやっていくのですか、リソースをどうするのですか、とにかく今は忙しすぎる、という意見が出てきます。

天野　その時に、これをやるために、これを止めようといえることが大切ですね。また、それが言えるような雰囲気がないといけませんね。

兼重　赴任する以前に、何度も徳山高専を訪ねる機会がありましたが、ロボコンに出場したマシンがきちんと展示され、これを見ると徳山高専の教育の方向性がよくわかりました。このようなことが、先ほど柏倉先生が言われた引き出しのひとつにも該当するのではないでしょうか。大したことではないように思われますが、外部の者にとってはとても大切なことだと感じることもあります。何事も一つ一つ形に現して積み重ねることが大事だと思います。

田村　個々の引き出しと高専全体という机の両方がいるように思います。どこかのクラブが頑張ると、ほかのクラブががんばるようになる、どこかの研究室ががんばると、ほかががんばるということはあると思うし、それと学校全体で何か目指しているということが明確になったら動きやすいですね。がんばりやすいですね。

司会　その辺をどうするか（笑い）。...。

兼重　仕事に追われ多忙なことも必要でしょうが、組織として行った仕事が報われるシステム作りが大切なのではないでしょうか。

天野　学校全体の改革に関する提案があれば、どんどん出していただきたいと思っています。同時に、いろいろなモデルケースに関する情報も提示していただき、それを検討してやれるかどうかも検討していきたいですね。さらに、外も巻き込んで内と外の両面から取り組むことも必要です。責任を持ってやりたいと思います。

情熱とチャレンジ精神

司会　最後に、お一人ずつ発言していただいて、終わりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

柏倉　今の徳山高専ではいけない、これはみんなの共通の思いだと思います。それをどうこれから変えていくかということを急いで考えていかなければならないという気がします。

兼重　何事にも情熱、ハートを持ってやっていきたいと思います。

山田　多忙であっても、納得できるのであれば頑張れるものだと思います。特に、教育に関しては合意が大切だと思います。

田村　「チャレンジ精神」が大切だと思います。時と場合によっては、「おい、これでいくぞ！ちゃんとやっとけ！」、これでいいんだと思います。

天野　学校という組織では、学生が何を考えているかを知ることが大切で、彼らの声を聞く機会を増やすことも必要だと思います。また、私たちが悩んでいること、困っていることを学生たちに伝えることも大切だと思います。
今日は、問題意識を持っている若い先生方に集まっていただき、よい座談会ができてよかったと思います。みなさんの意見を踏まえ、やるべきことは何としてもやる。ピエロになってでも踊り続け、是が非でも形にして見えるようにすることをぜひやっていきたいと思います。

司会　本日はどうもありがとうございました。

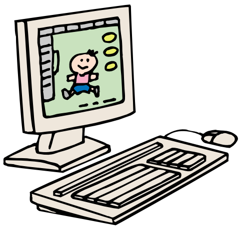
（司会、大成博文　広報委員）

大成先生

室長教授の
公開物理実験

デジカメクラブ
後ろは校長と市長

高専夢広場



徳山高専
チャレンジショップ
７月27日OPEN!!

物品搬入の日
設備担当グループ

徳山商工会議所のまちづくり機関「TMO徳山」が中心商店街の空洞化対策や商売人の育成のために、徳山市銀座旧サティ２階にチャレンジショップとくやま『街あい』をオープンしました。家賃は無料で飲食・食品、物販・展示、サービスなどの21店舗が集まっています。徳山高専もこの一角を借り受け、高専夢広場を開設しました。ここで色々な展示をして学校をＰＲします。開店初日はデジカメクラブによる無料の写真撮影や公開物理実験が行われました。液体窒素に浸けられた赤いバラがバラバラになったり、凍ったバナナで釘を打つなどの実演がありました。

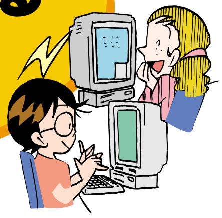
当面の企画スケジュール

- ７／27(土)～８／03(土)：オープン企画
- ８／04(日)～８／10(土)：学生会企画
- ８／11(日)～８／17(土)：専攻科企画
- ８／18(日)～８／24(土)：テクノ企画
- ８／25(日)～８／31(土)：機械電気工学科企画
- ９／01(日)～９／07(土)：情報電子工学科企画
- ９／08(日)～９／14(土)：土木建築工学科企画
- ９／15(日)～９／21(土)：寮生会企画
- ９／22(日)～９／28(土)：一般科目企画
- ９／29(日)～10／５(土)：専攻科企画
- 10／６(日)～10／12(土)：文科系倶楽部企画

10月以降については改めて

チャレンジショップを造る

環境建設工学専攻２年
森川　竜太郎



2002年７月８日。私が二級建築士の一次試験を終えると同時に徳山高専のチャレンジショップへの挑戦が本格的に始まりました。それまでにその様な企画があるという話は聞いていたものの、まるで他人事のように考えていました。しかしある日、S氏に「あんたは施工責任。」といわれ、「・・・はい。」と答えるしかありませんでした。それが、私の挑戦の始まりです。

チャレンジショップは７月27日オープン。それに間に合わせるために、何度も徹夜を繰り返した日々を送りました。徹夜で仕上げた図面が現場寸法の変更等で何度も設計変更になったことがありました。Boxの図面作成のために、急遽深夜に原寸大Box模型作製したこともありました。複雑な加工図面を持って、（株）みうらさんに行き、ムリなお願いをしたりもしました。しかしそんな苦労も今思い出してみればそう大した事ではありません。それは１つのものを仕上げたという達成感があるからだと思います。

今回のこのチャレンジショップ作製にあたっては多くの学生が関わっています。カウンター部のレンガを白く塗るのには専攻科生を動員して250を超えるレンガを２時間足らずで塗り終え、また、

左端が筆者です

完成

ショップ内にちりばめられているBOXの着色には美術部が応援に駆け付けてくれたりと、（多少のトラブルはあったものの）予定していた工期より早く、そして予想していたものよりはるかにきれいに仕上がりました。また、校内の先生方、事務官、技官の方々、校外からは業者さんや、職人さんたちにも多大なご協力をいただき、感謝しています。

今回チャレンジショップ作製で私は多くの事を学びました。実物大のものを造る事で得られた物作りの楽しさ。また、造ったものを人に誉めてもらった瞬間・・・ただ純粋に“うれしい”という感情がこみ上げてきました。そして最も大きく感じたことは、１つのものを造り上げるにはみんなの協力が必要であるということです。各自が自分の分担をこなせばそれなりのものは出来るでしょうが、よりよいものを造ろうとした場合、やはり人と人との協力が大切になってくる気がしました。これは特に根拠はないのですが、ショップを造っていくうちその様な気がしてきました。今回はそれが出来たからこそ、すばらしいものが出来上がったのだと思います。また、今回得た経験はみんなにとって将来の役にたつものになると確信しています。

最後に、徳山高専のチャレンジショップ;“高専夢広場”は2003年３月末まで開かれます。ぜひ足をお運びください。ご来場心よりお待ちしております。

チャレンジショップ建設の模様については「チャレンジショップへのチャレンジー学生による店舗の設計・施工の取り組み」として、以下のＨＰに掲載してあります。

http：／／www．tokuyama．ac．jp／home／～sasaki／yumehiroba／index．html

2002甲子園を目ざした夏

野球部主将
土木建築工学科３年　**中野　亮**

甲子園。そこは高校球児なら誰もが目指す場所です。

この夏、県内60校の高校がその甲子園を目指し熱い決戦を繰り広げました。もちろん、我が徳山高専野球部もその中の１校です。

「もう」ではなく、「やっと」という気持ちで迎えた１回戦当日。３年生にとっては、高校野球の集大成を披露する場を迎えたわけです。また、自分自身キャプテンとしての出場、昨年とはまた違うものがありました。相手は久賀高校。２－０とリードしながらも、追加点が入らず、嫌な雰囲気。そして中盤に１点を返されてしまいます。しかし、なんとかふんばり、悲願の初勝利。同時に５年ぶりの選手権予選初戦突破でした。この時のなんとも言えない興奮、嬉しさ、忘れられません。

翌日の２回戦、１回戦同様絶対勝つつもりで臨みました。多少の疲れはありましたが、一球一球集中し、同点に追いつかれ危ない場面もありましたが、全員野球で２回戦突破です。

そして３回戦、因縁の防府勢、防府高校との対戦となりました。なぜ因縁かというと、過去２年間防府勢に負けているからで。ここまで来たらプレッシャーは感じずに、思いっきり野球を楽しもうということで臨みました。しかしここはベスト８の壁なのか、序盤から防府高校におされてしまいます。そして反撃もとどかず、２－７でゲームセット。

試合終了直後は、３年間甲子園目指して頑張ってきたわけで、やはり悔しかったですが、今まで厳しい練習に耐え、ここまで頑張ってこれたことに、大きな充実感も感じました。

ベスト16。私達３年生は満足して良いでしょう。しかし１，２年生には満足してもらいたくはありません。来年、再来年とこの悔しさをバネに、より上を目指してほしいと思います。

この夏、最高の思い出ができました。応援してくれた皆さん、本当にありがとうございました。

インターアクトクラブ
韓国訪問記

情報電子工学科３年　**矢田絢子**

後列左から2人目が私です

私は、この春休みロータリークラブのお世話による、２泊３日の韓国研修旅行に参加しました。私にとっては、初めての海外旅行、初めての飛行機、初めてのホームステイと、初体験だらけの旅行でした。

初日、不安いっぱいの私の心とは裏腹に、時はどんどん過ぎていき、あっという間に韓国の仁川国際空港に到着。その後、すぐにホームステイ先の韓国の学生と面会しました。最初は、何を話したらいいのかもわからず、韓国の人は韓国の人、私たちは私たち同士で会話していました。先が思いやられる形でスタートしたホームステイですが、実はこの旅１番の思い出となったのです。私がお世話になったイム・イェチちゃんと一緒に買い物したり、イェチちゃんの友達も集まって一緒に韓国料理を食べたり、カラオケに行ったり、イェチちゃんの家庭でもプルコギをご馳走になりました。

こんな風に、１日という短いホームステイは過ぎていきました。翌朝、みんなとの別れの日。みんなと写真をいっぱい撮りました。そしてまだ話し足りなくて、別れたくなくて、いっぱい泣きました。バスに乗ってからもうつむいて泣いていると、イェチちゃんたちみんながバスに乗ってきてジュースを手渡してくれました。バスが発車するまでの短時間の間に走って買ってきてくれたのでした。この時、また絶対韓国に来ようと決意しました。今回のホームステイでは、イムさん家族、イェチちゃんの友達、韓国の人たちみんなのおかげで、心温まる１日を過ごすことができました。でも、感謝の気持ちがなかなか上手く伝えられなかったのがとても残念でした。いつかまた再会できた時には、この日の「ありがとう」を今度こそ伝えたいです。

２日目は、主に韓国の名所めぐりと買い物でした。景福宮では、容易に日本との文化の違いを感じることができました。そこは、緑、赤、黄色、青、白、その他多くの原色によって鮮やかに彩られた宮廷で、建物の造りなどもいくつか日本とは異なり、語り継がれる貴族の暮らしもまったく違うものでした。戦争記念館では、今の平和な社会が築かれるまでの長い戦いの歴史を知ることができました。豊臣秀吉の時代の朝鮮出兵のことなど、日本と韓国の戦争についても韓国の立場に立って話を聞くいい機会でした。自分が日本人としての目でしか歴史を見てこなかったことを、まざまざと感じさせられました。

３日目、日本に帰国し、無事２泊３日の旅行を終えることが出来ました。

韓国の人々との素晴らしい出会い、海外旅行という有意義な経験を与えていただき、ロータリークラブの方々をはじめ関係者の皆様に深く感謝致します。ありがとうございました。

専攻科中四国交流会

高知高専●4月25、26日

佐伯晴香の土佐日記

環境建設工学専攻２年　佐伯晴香

早起きはつらい・・。この日もそう思った。出発日の集合時間は６：30。こんなに早く起きたのは５、６年ぶりのような気がする。しかも前日から妙に緊張していた私は、しっかりとした睡眠もとれないまま起床し、冴えない気分でバスに乗り込んでいた。

いつしかバスは休憩をはさみながら山陽自動車道を駆け抜け、中国と四国を結ぶ掛け橋「瀬戸中央自動車道」に辿り着いた。私は四国に行ったことがなく、行き道の楽しみとしてこの橋を渡れることをずっと心待ちにしていた。橋から見える風景は予想していたものよりずっと綺麗で、視界一面の海は、普段見ている海と表情が違うようにも見えた。私達は橋を半ばまで渡った所で与島PAに立ち寄った。このPAはとても広くて眺めもよく、今まで立ち寄ったPAとは雰囲気が違っていた。

与島PA

また、この橋は自動車専用だと思っていたので、下路を電車が通っているのを見たときは本当に驚いた。そののち２時間くらい走ったところで、交流会の会場である「高知高専」が見え始めた。

高知高専の印象・・まずは敷地の広さに驚いた。

与島PAで記念撮影

バスが着いたのはとても綺麗な建物のそばだったのだが、この建物が専攻科棟だと知ったときも驚いた。私達の専攻科棟に比べ建物の規模が大きい！これはうらやましいかぎりだった。そして、学生服の子が原付に乗って帰宅しているのを見かけたときは、もっと驚いた。同じ高専でも校則が違うと雰囲気も変わるものだ。

定刻となり、いよいよこの度の目的である「専攻科中四国交流会」が始まった。ここで「専攻科中四国研究交流会」とは名前通り中四国の専攻科が集まって研究発表をするものである。中四国で専攻科があるのは６校。この６校という数は私にとっては多いのだが、皆はどのように思うだろう。

そして、全専攻科生を目の当たりにして感じたことをいわせてもらえば、「とにかく男の人が多い」ということだ。それは圧倒的だった。自分の在籍している専攻科でさえ女の人は少ないので覚悟はしていたが、これほどに女の人が少ないとは思ってもみなかった。しかも徳山高専に比べ、１校の専攻科人数が少なかったのも印象的であった。

発表は１日目、２日目に分けて行われた。私は２日目だったので、まずは他の専攻科生の発

表を聞くことに専念した。見慣れない難しそうな発表タイトルに少しひいてしまうところもあったが、ある程度は理解できたと思う。内容のことも興味深かったが、発表の際に耳にする「方言」はより新鮮なものを感じた。

１日目の発表も終わり、より親睦を深めるために懇親会が開かれた。みんな、お酒も入ってにぎやかな雰囲気で行われていた。一方私は、この懇親会で他の専攻科の人と友達になれればと思っていたのだが、積極的になれないでいた。すると校長先生が２人ほど女の子を連れてきてくださった（本当にありがとうございます！）。おかげでそれからは外へ向かっていくことができ、楽しい時間を過ごすことができた。校長先生は他の高専の生徒からも大人気でとても慕われていた。この会が終わった後も盛り上がりはさめることもなく、気付けば次の日に余裕で入っていた。疲れ果てた私は発表の練習などできるわけもなく、すぐに寝てしまった。

そして２日目。１日目は長く感じられていた発表の時間も、自分の番に近づくにつれ短く感じるようになるものだ。正直、あまり練習をしていなかったので不安なところも多々あった。しかし、「10分で発表は終わる！」と自分に言い聞かせながら臨んだ発表は、特に失敗をすることもなく無事に終了した．これは「今までの発表経験に助けられた」と思った。専攻科に入ってから、中間発表会や学会などプレゼンテーションをする機会が多い。その都度は、発表の練習など面倒だと思い、発表の場を憂鬱とさえ思っていたのだが、知らない間に緊張することもなくなり、よい意味で場慣れしてきたなと実感した。 これはきっと、自分だけに当てはまるものではないと思う。その理由として、６高専の発表を見たが、その中でも徳山高専の発表がグンを抜いてうまかった。みんな堂々としているし「慣れ」を感じる。だからこの「専攻科中四国研究会」は周りの専攻科生に対する現在の徳山高専の力を知ることができたので有意義なものだったのではないかと思う。私は発表に関してまだまだ直さなければならない点があるので、ここで学んだことを生かし今後に役立てたい。

日程も全て終わり、あとは帰るだけ。１泊２日のこの交流会はあっという間であった。この企画のおかげで一瞬にして中四国の専攻科生に出会え、自分と同じ進路を選んだ人達を目の前にしたわけだが、このことによって自分の位置というものを再確認できた気がする。私にとってこの出会いはとても貴重なものであった。これから、就職する人もいれば、進学する人もいるだろう。社会に出たときこの仲間達が、自分の専攻した道で少しでも世間に貢献できるよう、私はお互いの健闘を祈りたい。

情報電子工学科 3年生合宿研修

桐田　妙子

萩青年の家
5月9～10日
左手前が私です

私たちは５月９日から１泊２日で萩に研修旅行に行きました。私は萩にあまり行ったことがなかったのと、１年生の徳地の時と違い友達も増えたので、何日も前からとても楽しみでした。
まず萩青年の家を見た時、今まで見てきた青年の家とは違い、萩の町並みに合った古いお屋敷のような造りでとても驚きました。でも中に入ってみると、築20年を感じさせないくらいきれいに整備してあって、ここの管理態勢は相当厳しいだろうとこの時覚悟しました。

家での入所式などを終えてから、私達は萩市内の散策に出かけました。私の班は自転車を借り、まずは萩城跡に入りました。そこでは、おみくじを引いたり、神社のようなところに参っただけであまり多くはまわりませんでした。次に私達は城下町の方へ向かいました。城下町は道が細く、入り組んでいたので自転車を借りて本当に良かったと思います。自転車を返す時間もせまってきたので最後に海を見に行きました。やっぱり日本海はきれいで、足をつけてみたりして、とても気持ちよかったです。

この日の主な行事の締め括りは全員参加のスポーツでした。女子は前半の１時間はバレー、後半はドッジボールをしました。バレーは体育で何度かやっていたのですが、ドッジは高専に入って初めてだったので、普段とは違う友達の意外な一面が見れたりして、２時間すごく楽しめました。
２日目は萩焼作りをしました。初めに青年の家の人に作り方を教えてもらってから、私達もとりかかりました。「何を作るのか」、「誰のために作るのか」をちゃんと決めて作り始めた方が良いものができるとアドバイスされたので、私は自分のために湯飲みを作ることにしました。職員の人はすごく簡単に形を作っていたので、２時間も製作時間は必要なのか不思議だったのですが、いざ自分が粘土をこねてみると、以外に固くて形にする前の丸めるだけでもかなり時間がかかってしまって、結局完成したのは終了時間ギリギリでみんなより少し遅れてからでした。でも時間をかけた分、満足のできる作品ができたので１ヶ月後が楽しみです。

今回１泊２日しかできなかったのが残念ですが、規則正しい生活や、友達と１日中一緒に過ごすというのはなかなか出来ないことなので、私にとって、とても充実した２日間でした。

専攻科インターンシップ

社会人を体験しました

情報電子工学専攻１年　**竹重　和恵**

７月22日から８月23日まで、夏季実習で徳機株式会社にお世話になりました。徳機は、新南陽市にある圧力容器などを製造している会社です。ここで私は、１ヶ月間ホームページを作成しました。本格的にホームページを作成するのは初めてのことで、良い勉強になりました。ホームページ作成の技術についても学びましたが、それよりもこの夏季実習では会社で働くとはどのようなことかを学んだことの方が印象的でした。

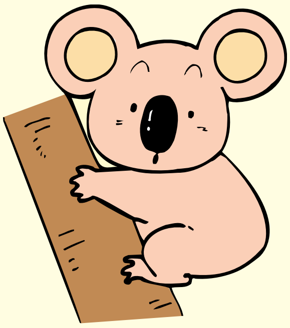
社員の中には、私と同じくらいの年齢の方もいらっしゃいました。とても年が近いとは思えないほどに、大人の振る舞いをされていました。お客様への対応や、電話の受け答え、当然のことながらどれをとっても立派な社会人です。学校では、１時間目のチャイムが鳴るまでに教室に入ってさえいれば許されます。しかし会社では始業の20分前には出社し掃除をし、始業に備えた準備をしなければなりません。些細なことですがどれもこれも新鮮であり、社会人として生活したことのない私にとって社会人とはどのようなものなのかをほんの少し知ることができました。

お忙しい中、私を実習生として受け入れ指導して下さった徳機の皆様には感謝しております。学校で学んだ技術と、夏季実習で学んだ社会人としてのあり方を、今後の生活に生かしていこうと思います。

情報電子工学専攻１年　**松浦　和則**

私は柳井市の日景電機でインターンシップをしました。ここで私は受注した装置の回路の組立とプログラムの開発、そしてその基板の設計を体験しました。装置は浄化槽にエアーを送るポンプの制御回路です。ポンプの間欠運転と電磁バルブによって各槽へのエアーの切り替えを行うものです。時計であるリアルタイムクロックＩＣとワンチップマイコンPICを使って作りました。プログラムの構築、実際の基板への実装をして試作品を完成させることができました。そしてCADで基板の設計を行いました。

この実習で感じたことは、高専で与えられる課題とは違うということです。ここでいう「違う」というのは技術面のことではなく、課題へ取り組む心持ちです。高専で出される課題は動けばそれで良いのですが、ここで作っているものは、例えちょっとしたバグでも見落とせば、それだけ周りに損失を与えることになります。そのため、自分のしていることに対して責任を持たねばなりません。ミスを見逃さないためにも強い責任感と、何度も当たり前のようなテストを行う根気強さが必要なのです。私は、ここに来るまでは少なくとも今の自分程厳しくはありませんでした。他にも様々なことを学びましたが、その感覚を学べたことが最も大きな収穫だったと考えています。



オーストラリア語学研修

G'day Australia

オーストラリア語学研修の引率を終えて

土木建築工学科教授　原　　隆

平成14年７月17日から８月12日までオーストラリア・シドニー市で本科生、専攻科生による語学研修が行われた。「世界に通用する技術者」のツールとしての英語研修と異文化交流を主な目的とした、初めての研修であった。私は、学生の引率と大学高専の学生、教職員の定常的な交流の可能性を探る仕事を仰せつかった。

学生の語学研修については、学生の稿に譲るとして、実り多い研修であったと結論付けたい。ここで、オーストラリアの大学事情について紹介したい。ご承知のように、オーストラリアの人口は約2000万人で州立大学は30を超える。人口比では相当多い数である。しかも、進学率は約30%（領事館に問い合わせたところこの数はつかみにくく、シドニー大学の先生の言を引用する）である。それでは誰が学生になるのか不可解である。しかし、答えは単純で留学生と社会人がこれを担っている。学生数でのみ計算すると約１／４は留学生である。このため各大学では国際局（International Division）に多くの人員を配置し、強力に受け入れを支援している。「教育はオーストラリアの観光に次ぐ産業である」という国際局の部長の言葉もまったくの冗談ではなさそうだ。

しかし、各大学では語学能力のレベルを厳密に守っているので各大学に語学研修学校を運営している。今回、学生がお世話になったUTS（University Technology of Sydney）Insearchはそれが特化した大学出資の企業体である。また、もうひとつの学生供給源としての社会人の入学も、エンジニアリング資格と技術教育経験が完全に連動しているので、資格を取得するために大学に行く傾向が定着している。

オーストラリアの大学運営は、いわゆる独立行政法人であり、外部運営組織の長（Chancellor）と内部運営組織の長（Vice Chancellor）が連携し、社会に開かれた大学を州政府、連邦政府の予算を中心に運営している。UTSが工科大学にもかかわらず、ビジネス、教育、看護の学科を備えていることは法人化の象徴とも思われる。なお、大学、高専の連携については、留学希望の学生が現れれば提携に入れる状態であるので、希望者があればぜひチャレンジしてほしい。

最後にオーストラリアの生活はいかがであったか？結論としては楽しかった（有意義が妥当？）。気候は正直にいえば寒かった。写真の半袖の男が私である。ただ、（やせ？）我慢である。しかし、日差しは厳しく、ずいぶん日焼けした。滞在は学生同様ホームステイであった。柔道選手とそのフィアンセのカップルにオッサンがおしかけて迷惑をかけたがめぐりあわせとあきらめてほしい。私は柔道を通じて数多くの知人を作ることができた。何がしかの一芸（Identityの一部）を持ち合わせる必要を改めて認識した。

また、４大学と３機関を訪問したが、学会活動で何らかの関係でつながりがあり、ありがたかった。お互い ” It's a small world. ” と笑いあった。近いうちにまた訪問したい。G'day Australia. Hallow Mate.

オーストラリア語学研修を終えて

機械電気工学科４年　赤松　武

今回の参加者　前列右が私

僕の２回目の短期留学は太平洋南部に位置する大陸・オーストラリアでした。今回僕達が英語研修を行った場所はシドニー工科大学（ＵＴＳ）の中のINSEARCHという機関で、ここでは日本人を含む多くの留学生が語学力向上のためのプログラムを受けています。３週間たらずと短いものでしたが英文法・リーディング・英作文など多くのことを学ぶことができました。滞在中はホームステイをして午前中は英語研修、午後や休日は市内の観光や大学の聴講・ショッピングなど有意義な時間を過ごすことができました。

ただ僕の場合はホストファミリーにはあまり恵まれず、食事の際ファミリー内で口論になることもしばしばだったので、あまり家にはいたくなかったというのがホントのところです。しかしそれが一緒にステイしていた他の国からの留学生との絆を深めるきっかけになりました。時にはホストファミリーの人達も含めて政治や経済・商業倫理や歴史などといった難しい事も議論しましたが、自分の国や自分自身についてしゃべったりするのは楽しかったです。

いろいろなことを体験したこの語学研修旅行でしたが、英語のコミュニケーションがどういったものなのかを肌で感じることができたかけがえのない１ヶ月間でした。アイルランドの気候と風土にひかれ、英語を上達させいつかまた戻ってきたいと思い勉強を続けてきましたが、その思いは遠く離れたこのオーストラリアで実現することができたと思います。

土木建築工学科４年　大石明香

今回、学校の海外研修としてオーストラリアに約１ヶ月行って来ました。行く前はとても長く感じていたのに、１ヶ月はあっという間に過ぎてしまいました。

向こうでの生活は、それぞれホームスティしながら平日は8：30〜13：00まで英会話学校、13：30〜15：30までactivity、土、日はそれぞれホストファミリーと過ごしたり、自由に観光したりしていました。そう、日本の学校に通うのとほとんど変わりのない生活をしていたわけです。ただ違うのは、使う言葉が“英語”であるということでした。

向こうでの生活はとても充実していました。毎日シドニーの街を散策して、ガイドブック制覇です！観光ばかりでなく、ホストファミリーとの生活もとても楽しいものでした。週末には、ヨットでセーリングです。本当に楽しくて、今でもオーストラリアに飛んで帰りたいくらいです（飛行機はうんざりですが・・・）

少しでもこの海外研修に興味のある人は、ぜひ来年参加してみてください。とてもいい経験になること間違いなしです。写真の一番前が私です。

★★★★★★★★★★★★★ 合格おめでとう ★★★★★★★★★★★★★

開学以来の最年少合格

ソフトウェア開発技術者試験合格

情報電子工学科２年
吉崎　　航

今回、僕の受験した「ソフトウェア開発技術者試験」は旧「第一種情報処理技術者試験」と同じもので、卒業までにこの試験に受かることは、高専に入学したときからの目標でもありました。

ですから、これからも社会に出たとき、資格の名に恥じないような技術者となるために努力していきたいとと考えています。参考になるかどうかわかりませんが、今回僕がおこなった、試験に際する準備と勉強法について紹介します。

・問題集（過去問題など）は一切しない
・午前・午後とも一冊の参考書で勉強する
・参考書には自作のカバーをつける
・時間を決めて勉強しない

ちなみに、今回使った参考書（教科書）は、技術評論社の「ソフトウェア開発技術者試験<午前>まるわかり直前整理」のみです。要は、理解することを楽しむ（愉しむ）ことが目的なので、解るまで何度も読み返し、解ったつもりでもなお読み返せばよいということです。ですから、参考書には愛着を持てるように、包装紙などの自作カバーをつけます。（今回は徳山市指定の燃えるごみ袋を使用）

実際、休日は公園で、放課後は図書館で、とにかく読みたいときに読むようにしました。

さらに、もう一つ重要だったのが教官から助言を頂くことでした。特に、原田教官や、ＩＥの諸先生方には、多くのアドバイスを頂き、とても感謝しています。これからも、ゴールにもたれかからずに、常に新しい目標に向かっていきたいと思ってます。

色彩検定を受験して

情報電子工学科３年
野崎美紀子

私が昨年秋受験した「色彩検定」とは、社団法人全国服飾教育者連合会が主催している文部科学省認可の検定です。この検定の内容は、色の３属性や色の見え方などの美術的なものから、目の生理学や可視光線などの物理的な理論、環境、照明と色の関係や、色彩計画などの建築や景観に関するもの、そして繊維の知識やファッションに関するものまでとても幅広いのでよく分からないかもしれませんが、私は「毎日の生活で使っている『色』に対する感覚をそのまま言葉にしたもの」だと思っています。

私は小学生の頃からデザイナーになることが夢で、学生である私にとってこの「色彩検定」は今すぐ夢につなげられるような気がしたので受験を決意し、準備を始めました。まずガイドやＨＰを見たり、本校美術部の先生から直接話を聞いたりして、検定の内容や目的を把握し、それから本試験型の問題集で勉強しながら配色カードで色名とトーン名を覚えました。ここで大切なことは、まず短時間で丸暗記せず、時間をかけて少しずつ理解していくことです。その為には資料がたくさんある参考書を購入して勉強することをお勧めしますが、どうしても時間がない時は、私のように本試験型の問題集で勉強しても十分良いと思います。次に大切なのは、「普段の『色』に対する感覚」を勉強していく内に、それを日頃からの意識に変えていくことです。そうすることで、身の回りの全ての物が勉強のための題材になります。

「カラーコーディネーター」は公的なライセンスではありませんが、身に付いた知識や技術は就職、仕事や毎日の生活など幅広い分野で活用できます。「自分を表す個性的な資格」を一つでも持っていれば、個性を生かせる仕事に就いたり、就職活動でも自分をアピールできるのではないかと思いますので、皆さんも何かそういう資格を取得してみてください。

皆さんよろしく

保健室・学生相談室の紹介

保健室

看護師　**松尾葉子**

　私はこの春、山口県立大学（「宮野の女子大」と言えばご存知の方も多いと思いますが）の看護学部を卒業し、学生課学生係でお世話になることになりました新人看護師です。ついこのあいだまで、皆さんと同じようにテストやレポートに追われている学生でした。

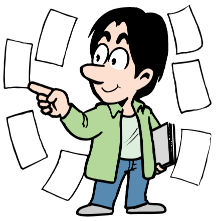
　皆さんとは４月の健康診断の時にお会いしていますが、まだまだ皆さんの顔と名前が一致していません。午前中は学生課、午後は保健室にいますのでのぞいてみてくださいね。

　「人に接する仕事がしたい」と思い、看護の道を選びました。でも私はそれほど、人付き合いが得意というわけではありません。

　皆さんにとって「保健室」ってどんなところですか？実は私、小学校・中学校時代、保健室に行った記憶がほとんどありません。そして高校には看護科があったので、養護教諭がいませんでした。しかも、私は学生時代それほど学校が好きではなかったのです。

　「じゃあなぜ看護師なの？どうして保健室なの？」と思われるでしょう。実はまだはっきりとした答えは見つかっていません。でも、看護師としてこの保健室という場所で、私にしかできないことがあると思っています。それをこれから皆さんといっしょに過ごして行くなかで、見つけたいと思っています。看護師としてまた社会人としてはまだまだひよこですが、皆さんがこの高専でたくさんのものを得て巣立って行かれるように、私も大きく羽ばたける鳥になりたいと思います。よろしくお願いします。

学生相談室



　学生相談室の役割は、２つの柱からなっています。一つは学生のさまざまな悩みの相談にのり、助言や場合によっては行動指示をすることによって、少しでも問題解決に近づけようとする相談活動と、もうひとつは、すべての学生に対して発達に必要な援助を行う発達援助活動です。

　相談活動は、４名の相談員（教官）と看護師で行っています。相談員は毎日放課後に相談室にいますから、予約なしで相談できるようになっています。もちろん、相談依頼があれば放課後に限らず相談にのっています。相談内容は勉強、進路、家庭、対人関係、心身の健康状態などさまざまで、種類や問題の大小にかかわらず気楽に相談に応じています。相談内容から、相談員の対応では解決が難しいと判断した場合は、毎週木曜日の午後に本校にきていただいている専門のカウンセラーの先生に対応を依頼するようにしています。図に学生相談室の位置付けを示します。

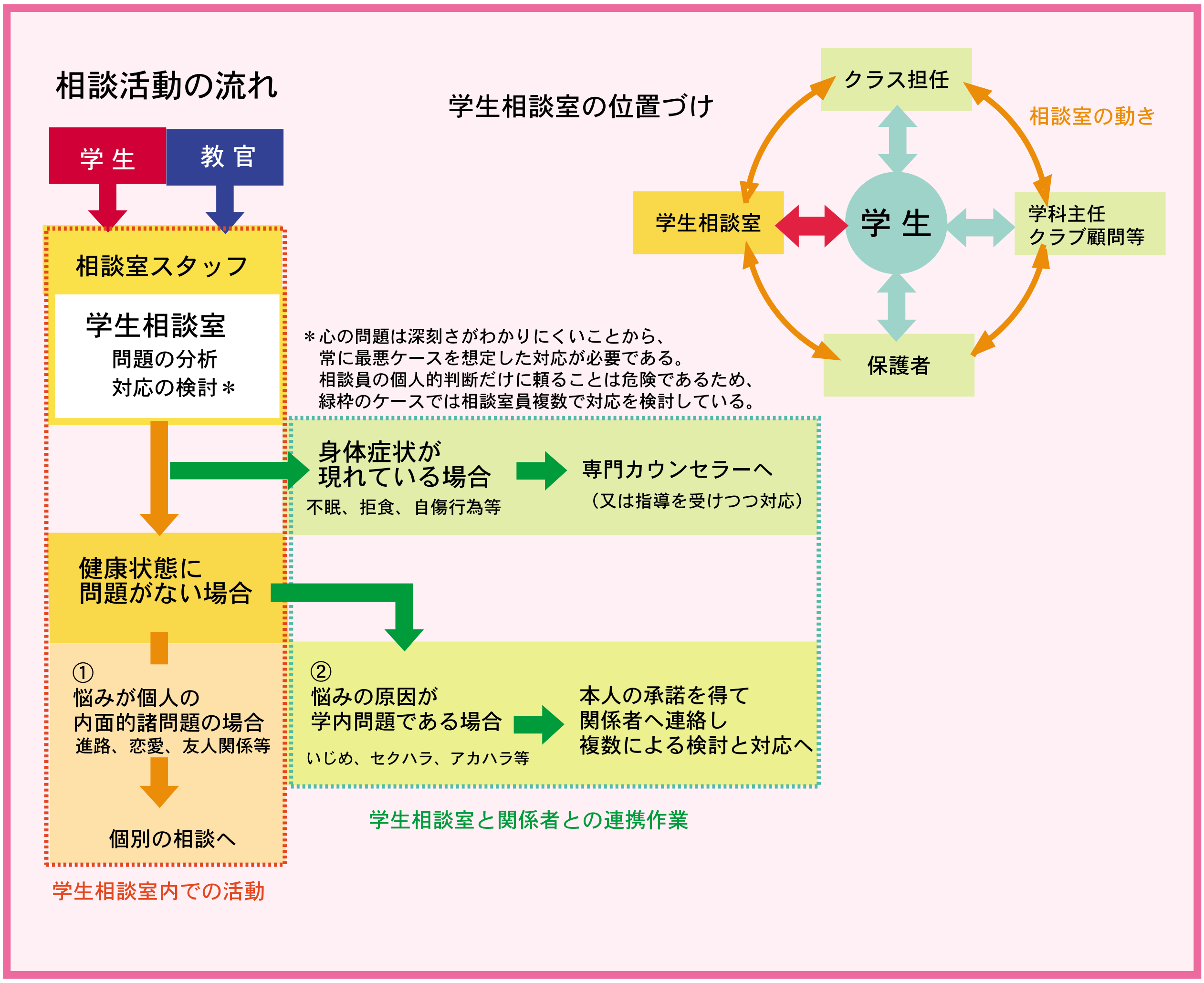
　発達援助活動は、学生のみなさんに自分自身を見つめる機会を提供し、少しでも発達の手助けになるように、以下に示すような検査ツールを使用して実施しています。

（１）　新入生アンケート：入学した学生への早めの援助活動ができるように、入学時にどのような問題や不安を抱えているかを知るためのアンケートです。

（２）　マルチ検査：高専という場と自分の関係を意識し始める１年生の後期に、自分の性格と現状に対する適応状況を知るための検査です。

（３）　VIP検査：早期に職業意識を高めさせることと、個々の学生の進路指導に役立てるため、３年生に行う検査です。

（４）　TEGエゴグラム検査：学生の自我の発達状況、傾向を学生と相談員が共有し、具体的な発達援助の方法を探るための検査です。



学生相談室員の自己紹介

馬渡　賢治（情報電子工学科）

私は学生相談員の中で一番の年輩ですが、若い皆さんに負けないように「心にときめきを」をモットーに、歳をとっても何かにチャレンジすることを心がけています。 五十の手習いで無謀にも尺八に挑戦し、六十の手習いでお習字を始めています。両方とも思うように上達しないので、悶々とすることばかりですが、楽しい発見がたくさんあります。先のことですが、七十の手習いは何にしようかと、今から心ときめかしています。

国重　　徹（一般科目）

学生相談員４年目の国重徹です。趣味は、ドラム（ジャズ、ボサノバ、ゴスペル）演奏、英会話、格闘技鑑賞、大食い（カツ丼、カレー）、ダイエットなどです。 新婚の頃、「体重が３桁になったら離婚する」と妻に宣言されつつ、何とかごまかしながら結婚後13年目を迎えております。さて、問題の体重の方は・・・？！　とにかく人と話すのが大好きなので、皆さん教官室や相談室に話をしに来てくださいね。よろしくお願いします。

大西　　厳（機械電気工学科）

最近、アコギ同好会というものを発足させました。アコギといってもあこぎな同好会ではなく、アコースティックギターをひく（歌う）同好会です。（部員募集中）大きな声で歌ったり、自分の思いを曲にしたりすると、もやもやしたものが吹き飛びストレス解消になります。「おもいっきり仕事をして、おもいっきり歌う」そんなスタイルが自分らしくていいかなと思っています。

日南住　博（土木建築工学科）

普段は物理や応用物理といった学生の皆さんには人気の良くない科目でお付き合い願っておりますが、この度、学生相談室の仕事に携わることになりました。私はこのような仕事については全くの素人ですが、馬渡室長を始めとして他のスタッフの皆さん方は十分な経験を積んでおられますので、大船に乗った気持ちでおります。学生の皆さんも相談室を保健室の延長と考えて、敬遠せずに話しに来てみてください。

卒業生紹介

私の仕事―建設コンサルタント業―

土木建築工学科　第８期卒業
山原　康嗣（中電技術コンサルタント㈱勤務）

⑴　はじめに

社内の徳山高専卒業生として古参ということからか、この原稿依頼がきましたが、高専時代に怠惰な学生生活を送っていたことや会社に対してさほどの貢献をでき得ていない現状からして、私がこの紙面を割くことは、誠に僭越で気恥ずかしい限りです。

そういう私でも、最近ようやく仕事の魅力や喜びを感じるようになり、参考になるかはわかりませんが、この業のこととともに、高専生への期待などを記させていただきます。

⑵　建設コンサルタント業

「建設コンサルタント」という業種は、高専生にとって比較的なじみの薄い業種だと思います。恥ずかしい話ですが、私も在学当時は、その業務内容について十分な理解をしていませんでした。

「建設コンサルタント」の一般的な定義は、「社会資本整備に関する工事の調査、企画、立案、助言、設計もしくは監理を行うもの」とされています。

「社会資本」とは、人間社会が発展し存続するのに必要な交通・通信、上下水道などの共同利用施設や河川・海岸などの国土保全施設などの総称で、今の建設コンサルタントでは、これらの整備に広範に深く関わっています。

⑶　当社の高専卒業生と私の仕事

現在私の会社には、徳山高専卒業生が６名在籍しています。全員が土木建築工学科の出身ですが、所属は、土木、環境、情報と様々です。

このうち私は、環境部という部署に所属しています。各種開発事業に係る環境調査や解析、環境保全対策の検討などを行いますが、近年は、ダム貯水池や河川、海域の水質問題を中心とした仕事に携わる機会が多くなっています。

高専卒年	最終学歴		配属分野		性別		他高専
S61〜H7（S44〜H12）	高　専	2(11)	土木	4(14)	男	5(14)	徳山(6)
	専攻科	1(0)	環境	1(0)			呉　(9)
	編入大学	0(2)	電気	0(1)	女	1(0)	松江(4)
	大学院	3(1)	情報	1(0)			詫間(1)
	6(14)		6(14)		6(14)		20

注：（　）内は他の高専出身者の人数

⑷　求められる技術者像

今、建設事業は、厳しい社会・経済構造の変化に対応し、21世紀における社会基盤の整備をいかに進めていくかを問われており、建設コンサルタントも変化への対応が求められています。

我々にとって最も大切なのは、社会が真に必要とする社会資本について、「より良いものをより安く」実現する技術の開発と研鑽で、求められる技術者像は、専門性・社会性・人間性のバランスのとれた「足腰の強い大きな技術者」です。特に、中国地域に根付く技術者として、社会動向に関心が深く、地域ニーズと事業全体像を把握し、発注者を支援できる人材が求められています。

⑸　建設コンサルタントの魅力

ここからは私見になりますが、この業の魅力は、「仕事のやりがい」にあると思っています。

社会の問題や人間生活をより豊かにする課題について、それらにどう対応するかを考えて、提案することで報酬を得る。よい提案であれば実現し、社会貢献ともなる。加えて、意欲と相応の技術力があれば、早い段階から責任ある仕事をさせてもらえる。業務の課題や目的の大きさ、結果の社会的影響力などからプレッシャーを感じることもありますが、「これほどやりがいのある仕事はそうない」と、この仕事には大きな誇りをもっています。

⑹　高専卒業生への期待

当社のベテラン技術者が社内の一般的な高専卒業生像として、次のようにいっていました。

・概して頭がよくて根性があり、実務者として優れた人材が多い。即戦力になりやすい。
・一方で、世知に長け、若い時の処理力は高いが、長い目でみると伸び悩んでいる場合が多い。
・技術以外への視野が狭く、創造性、意外性に乏しい。

私自身が、会社で教えられた、「自然を理解し、社会を理解し、人間関係の中で仕事を行う」、こうした思考が欠けていたかと自戒しています。

これからそれぞれが仕事をもち、時代を担う予備軍として、「何のために学んでいるか」を考えて、充実した学生生活を送って欲しいと思います。

住民評価の高い地域計画・環境デザインを目指して

私の研究

土木建築工学科助教授　熊野　　稔

私の専門は、地域都市計画及び環境デザインですが、一級建築士として建築物の設計も可能です。大学院から母校に帰って20年が経過し、その間の研究面での通算成績は、論文・著書250編、ISBN登録専門著書13編、学会発表65編、依頼専門講演は、北は北海道・阿寒町から南は沖縄・名護市まで300件程度となります。世界動向や情勢を観察しながらも、日本の国土全域を研究対象地域としております。

私の研究スタンスは、現場・フィールドでの調査と住民意識評価を重要視する事であり、独創性と新規性、有用性を機軸に、実際の地域をモデルとしての分析や実証・実績を提示する事をモットーとしています。具体的な研究テーマとしては、都市計画では、地方都市の中心市街地の活性化に関する研究、景観計画の手法、商店街の再構築、都市緑化計画、都市形成史、地域産業の活性化計画、観光地計画、まちづくりの事例評価など、農村計画では、「道の駅」の計画と改善及び地域振興に関する研究、廃校活用による地域振興、温泉街の活性化方策、グリーンツーリズム・交流人口増加施策の手法、村おこしの事例評価、農村景観の向上方策、などこうした研究テーマを通じて、実際に地域が活性化した町の事例、菊川町や錦町他等がいくつかあります。

道の駅　きくがわ

環境デザインでは、「ポケットパークの計画と管理に関する研究」が代表的です。これについては20年来の研究実績と学会審査論文が認められ、長岡技術科学大学より博士（工学）（論文乙190号）を授かりました。この内容は、1967年に米国ニューヨーク市で開設されたPALEY PARKが原型とされるベストポケットパークが日本にも移入され、特に1980年代以降に顕著に普及しました。市街地や住民の用、憩、美に役立つとされる反面、設計や管理上の問題もあり成功例とは言えないものも指摘されました。一方、公園や広場、住宅団地のコモンスペースの研究は既に多くが成され蓄積も豊富ですが、ポケットパーク的空間を扱った研究は歴史もまだ浅いこともあり、非常に数が少なく、公開空地や東京の震災復興橋詰広場の研究にとどめるに過ぎません。しかし、手軽に建設されうることなどから、現実にはまちづくりや様々な環境デザインでポケットパークが採用されることが多く未だ増加傾向にある中で、ポケットパークの学術的体系化および評価等を明らかにし、満足度と効用性の高いポケットパークの、計画と管理の基本的条件と方向性を示すことが求められます。

そこで本論は、ポケットパークを「市街地や集落内で公開利用可能な、緑やベンチなど何らかの機能を持った道路と接した小広場空間」と定義し進めました。約1000㎡ 以下の日本全国のポケットパークのデータを可能な範囲で収集し、各種調査、評価及び分析を行いました。そしてポケットパークの動向、事例評価、空間特性、類型化、行政、住民や利用者評価、などを明らかにしてポケットパークの計画構成などの体系化を図り、計画と管理を行っていくための基本的条件と方向性を明らかにしました。

最終結論としてポケットパークは市街地整備において必要であり、地元の住民参加で計画・管理が行われることが有効としました。この他にも私の研究室で研究・開発している「道の駅」やまちづくり関連のノウハウ・知見が数多く蓄積されつつあります。

興味のある学生はぜひ私の研究室に来てください。調査研究の苦労はありますが、苦悩を突き抜け纏め上げた喜びはそれ以上のものがありますよ。

明治の元勲
伊藤博文公のふるさと…

機械電気工学科
事務（IE卒業生）
田村　光子

徳山から車で30分程走ったところに目的の公園はあります。（今はきれいな道が通っています。こんな山の中にあるのかな・・とちょっぴり不安になるけれどちゃんと要所要所には案内板がでていましたから迷わずたどり着けました。）ここは私が学生時代を過ごした熊毛郡大和町の東荷というところです。

伊藤博文公の生家

駐車場に車を止め、入り口を入ると目に鮮やかな濃いピンクのツツジが満開で迎えてくれました。その目の前に伊藤公記念館があります。（残念ながら現在復旧工事中で網がかけられておりその外観を全望することはできませんでした。）ルネッサンス風洋館２階建てのこの記念館は、伊藤公自らが基本設計したもので、公の生家である林家および養子縁組先である伊藤家の親戚を招いて法要を行うために建てられたといわれています。その左側にはレンガの赤茶色と白い窓枠とのコントラストも鮮やかな明治風建築の伊藤公資料館（＊２）があります。この資料館には伊藤公の遺品等、多数展示してありました。当時でも最高級のものであろうと思われる調度品の数々、鉄製の長椅子やベッド（子供用ベッドかと思えるほど小さい）これらは外国製でしょうか、どれも目を見張る素晴らしいものばかりです。

著名な方々の直筆の書が多く展示されている中で興味深い書を見つけました。伊藤公直筆の都々逸（とどいつ）です。

“来てはいやだと　電報をかけて
　とめて　おまへの　気をひいた“

何ともにくいではありませんか。来るなといわれれば行きたくなるのが心情。人間の心理（女心）をついた唄ですね。「伊藤博文」といえば何と言っても少し前まで使われていた旧千円札を思い出される方も多いと思いますが、もちろんその第一号券がここには展示してありました。現在使われている夏目漱石の紙幣に比べて一回り大きくデザインもおしゃれで趣があり、ある種の風格さえ感じられました。一見の価値あり・・です。

家を空けることの多かった博文は旅先から婦人に当てて多くの手紙をしたためていたようです。フランス・パリからの手紙の中に面白い文章を見つけました。

「子どもはあまり内ばかりにおき候てはよろしからず、あさばんはくたぶるゝほど　あそばせるがよろし・・」このくだり、子育て真っ最中の私は思わず、よし！と小さくうなずいてしまいました。

伊藤公の等身大パネルには簡単なプロフィールが紹介されてあり、ここにも面白い驚きがありました。

伊藤公記念館

・　好きなもの　食事　番茶、梅干、茶漬
　なんと庶民的な…
・　尊敬する人物　明治天皇、おかか（梅子夫人）

笑いました。日本を動かした要人も婦人には頭があがらなかったようですね。

また、シアターホールでは100インチのスクリーンで伊藤公の「望郷～おとずれぬ春～」をテーマにした映像が常時上映されていました。韓国の李皇太子を招いて公が晩年過ごした大磯の海岸で戯れる貴重な記録映像もありました。

ここで少し伊藤公の生立ちと業績について簡単に復習してみましょう。

伊藤博文は天保12（1841）年９月２日、林十蔵・琴子夫妻の子・利助として生まれ９歳までをこの地で過ごす。その後，萩に移り、父十蔵が長州藩士・伊藤家の養子となったため伊藤姓を名乗る。

・・伊藤博文とここ大和町束荷にどんなつながりがあるのか、当初とても不思議でした。本当は林姓で養子に行き伊藤姓になったのだと知った時、束荷から来る同級生に林姓が多かったことを思い、変に納得したものです。そして歴史上の教科書の中で学んだ伊藤公が急にとても身近に感じられたものです。・・

本題に戻りましょう。

吉田松陰の松下村塾に学んだ後、桂小五郎（木戸孝允）、高杉晋作、井上馨、山縣有朋らと倒幕運動に奔走する。明治維新後は新政府の要職を歴任し、明治18（1885）年には初代内閣総理大臣となり、同22（1889）年に発布された大日本帝国憲法制定の中心人物として活躍するなど明治を代表する政治家となる。

・・伊藤公が総理になったのは45歳の時になりますね。今からすれば随分若い総理といえます。当時の平均寿命からすればどうだったのでしょうか。・・

伊藤公
産湯の井戸

その後，明治42（1909）年10月26日、満州ハルビンにて狙撃され死去。享年69歳（伊藤公資料館パンフ引用）。

幕末から明治末までの日本の動きを学習できると共に伊藤公の生涯が偲ばれる素晴らしい資料館です。

資料館を出て少し奥に行くと一見全く対照的な藁葺き屋根の「生家」があります。ここは伊藤公が６歳まで過ごした家を復元したものだそうです。今では珍しい厚さ30cmはあろうかと思われる藁葺き屋根を見上げこじんまりした生家に当時の暮らしが偲ばれます。その生家の裏に「産湯の井戸」があり、その横には樹齢200年とも250年ともいわれるモミジの古木が当時のままに根をはり時代を見つめているようでした。

資料館の裏の階段を登り、少し坂道を登り切るとそこは「伊藤広場」です。広場の奥からは椅子に腰掛けた伊藤公の銅像が静かにこちらを見据えていました。この前に立ち、公の言

『人は誠実でなくては何事も成就しない。誠実とは自分が従事している仕事に対して親切なことである』

を、心の中で２度繰り返して読み、３度目は声に出して読んでみました。・・どんな心境で詠まれたのだろう、何歳の時に詠まれたのだろう・・色々思いを巡らせながら…分かりやすい言葉でありながら重みがあり、現在でも十分通用する奥の深い言葉だなぁと感銘しました。この言に触れられただけでも来て良かったなと思いました。

左前方に石城山を臨むのどかで心地よいこの広場を久しぶりに訪れたこの日は５月とはいえ少し歩くと汗ばむ陽気。鳥のさえずりに誘われて遊歩道を下っていくと、そこには気ぜわしい日常を忘れさせてくれる自然豊かなオアシスのような空間がありました。

“百聞は一見にしかず”。皆さんもぜひ一度訪れてみられてはいかがでしょうか。

＊１　伊藤公記念公園の場所：
熊毛郡大和町大字束荷2250－１
TEL：0820－48－1623

＊２　伊藤公資料館の利用の案内
開館時間：午前９時～午後５時
休館日　：月曜日（祝日の場合は翌日）
12月29日～１月３日
入館料　：一般／400円
高校・大学生／300円
小・中学生／200円

鹿野町金峰にログハウス建設

木の文化を伝える会「匠塾」から

匠塾々長　土木建築工学科教授　**木村武馬**

野山や川で遊ぶ子供の姿がなくなりました。伝統的な生活技術や作法が廃れています。“うさぎ追いしかの山”に、鳥や虫がいなくなり、“小鮒釣りしかの川”から、魚や蛍の姿が消えた頃と、時期は一致するようです。父祖伝来の手仕事、もの作りの技や精神を失うのは余りにも惜しいと思います。よくも悪しくも物と心は一緒に変化するものです。かけがえのない自然、身近な川や山の意味を見直す必要があります。生活の技を後世に伝えることは、なくしたくない“日本の心”を伝えることにもなります。

今年４月27日、鹿野町金峰（ミタケ）に“匠塾”が発足しました。金峰は「防長の吉野をつくる会」の舞台で、“生きがい村づくり”の計画が進んでいる山あいの里です。里山の恵みを活用し、木の技をテーマに幅広い交流、技術の伝承を目指すこのグループの活動には、うってつけの所です。発会式の様子は新聞数紙に紹介され、反響を呼びました。まだ始まったばかりですが、塾の現状と活動の一端を紹介します。

7月14日の作業参加者一同。岡崎君制作の完成模型を前に

７月現在、会員数は46人で50代以上が大半です。このテーマが一般の広い関心を、とくに中高年の大きい関心を惹いていることが分かります。リタイア世代、会社員、農業、建設業、教師などメンバーは様々で、棟梁級の大工、本校卒業生の父兄も何人か参加しています。最高齢者は72歳、女性６人と25歳の若者がいるのは頼もしい限りです。人と人が出会い、技と技が出会って、新しいものが生まれることが期待できます。“塾”と名付けたのは、教え合い、学び合う場となることを願ってのことです。

多くが素人の集まりなので、道具の使い方や木の加工技術の修得から入らなければなりません。活動拠点も自力で作りたい。そのために、先ずログハウスを建てたらどうだろう。幸い、ログ技術のリーダーとなる人材があり、ログハウスには参加者の多くが興味を持っています。建設の過程で人の和と輪を作り、その技術をものにしよう。と発会式で当面の目標が定められました。

定例の作業は毎月第２日曜日です。必要に応じて臨時の作業日を設けています。７月までの作業で丸太の皮むき、基礎、土台の据えつけが完了しました。次回８月には、いよいよ本格的な工程、ログの壁積みに入ります。１年後（？）にはログハウスが完成します。一技一芸の持ち主のもとに、分科会が作られ、種々のクラフト活動が開始されます。子供たちも巻き込んで面白い多彩な活動にしていく予定です。

土台墨打ち風景。CA5年岡崎君が墨打ちに挑戦

どうぞよろしくお願いします

留学生・編入生の紹介

情報電子工学科３年
氏名：セレイヴィラ
出身：カンボジア

　あっという間に、もう一年間の日本語学校を卒業しました。だけど、高専での勉強はまだ困ることが多くあります。高専では方言もあるし、話し方もちょっと難しいと思う。特に授業の時に、なんとなく難しいと感じています。ま、これから皆さんとお友達になっていろいろ教えていただき、早く皆さんのように日本語も勉強も上手になるよう頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

土木建築工学科３年
氏名：フーオン
出身：ベトナム

　徳山高専に来てから二ヶ月たち、先生方と同級生のみなさんがいろいろ教えてくださったおかげで、だんだんとなれてきました。学校の周りは、自然に囲まれ、その美しさが大変気に入っています。
　これからまた３年間勉強など、いろいろなことに精一杯頑張りたいと思うので、よろしくお願いします。

機械電気工学科４年
氏名：石光紀夫
出身：南陽工業高等学校

　高専に入学してきて、みんながとても勉強熱心であることに驚きました。勉強のレベルが高い上に、みんながんばっているので、なんとかついていってはやく同じレベルまでおいつきたいと思っています。卒業までなんとかがんばっていきたいです。

機械電気工学科４年
氏名：久保田隆志
出身：下松工業高等学校

　高専は勉強がとても難しくて、ついていくのがやっとです。授業でレポートが始めて出たとき、全く分かりませんでした。なのに他の生徒が普通に問題を解いているのを見て、何でできるんと思いました。今はかなり差があると思うけど、この差を少しでも早くなくせるようにがんばりたいと思います。

機械電気工学科４年
氏名：高橋幸祐
出身：下松工業高等学校

　工業のときと違って、高専は高い所にあり、行くだけで疲れます。もうユンケルぬきでは生きられません。趣味はサッカーで見るのもするのも好きです。いろいろと分からないことがあると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

土木建築工学科４年
氏名：石渡　啓
出身：下関工業高等学校

　高専に編入して２ヶ月ばかりたちました。僕もだいぶん高専色に染まったような気がします。高校の時と違い、勉強のペースがとても早いので、毎日毎日、血のにじむような苦労をしていますが、学校生活はとても充実しています。趣味は読書とビデオ鑑賞です。お世話様になりますがよろしくお願いします。

土木建築工学科４年
氏名：重村英夫
出身：岩国工業高等学校

　編入して２ヶ月たち、けっこう学校にもなれました。最初はつらかった早起きも学校に通っているうちに体が慣れて、今では休日でも朝早く目が覚めたりします。しかし、勉強は難しくなる一方で、全然慣れません。さらにテストも迫ってきているし、正直今焦っています。これから先ますます忙しくなるだろうけど頑張っていきたいと思います。

新任教職員紹介

兼重　明宏さん（かねしげ　あきひろ）

機械電気工学科助教授

○ご出身はどちらですか？

山口県新南陽市で、1964年生です。

○本校にこられる前はどちらに？

大島商船高等専門学校の商船学科に勤めていました。

○徳山高専の印象は？

活力ある学校だと思います。

○ご家族は？

妻と４歳の長男、２歳の長女の４人家族で、光市に住んでいます。

○ご趣味は何ですか？

旅行とスポーツです。

○今後の抱負をお聞かせください。

現状に満足することなく、何事も「凡事徹底」で行うことにしています。学生諸君の学生生活が充実したものになるよう、共に学び、汗を流し、時には怒り、泣き、笑って、教育と研究に情熱を傾けたいと思います。よろしくお願いします。

上甲　克和さん（じょうこう　よしかず）

庶務課長

○ご出身はどちらですか？

出身地は愛媛県野村町です。愛媛県では、県内を東予、中予、南予の三つに分けて表していますが、その南予にあたる所で、県都松山市から約100㎞南にあります。

○本校にこられる前はどちらに？

採用以来、愛媛大学に勤務し、主に庶務、人事関係の仕事をしていました。

○徳山高専の印象は？

これまで、大学しか経験がありませんでしたので、高校に来たようで新鮮でした。

○ご家族は？

妻と子供２人の４人家族ですが、家族は松山市に住んでいますので、単身赴任中です。

○ご趣味は何ですか？

趣味はスポーツと言いたいところですが、それは昔のことで、現在は、専らガーデニングと休日に街中を徘徊し、下手な写真を撮っています。

○今後の抱負をお聞かせください。

微力ながら、徳山高専の充実・発展に貢献できればと思っております。

山岸　正さん（やまぎし　ただし）

学生課長

○ご出身はどちらですか？

新潟県の山奥で生まれ育ち、それ以降はずっと東京です。

○本校にこられる前はどちらに？

直前は国立天文台ですが、その前は大学入試センターと東京大学に在職しました。

○そこではどんなお仕事をされていましたか？

国立天文台では、庶務課課長補佐として主に研究協力、大学院教育、共同利用、外国人研究者の受入、南米チリにおける大型電波望遠鏡計画等を担当していました。

○徳山高専の印象は？

入学式の時、新入生の親が若いのでビックリしましたが、よく考えたら自分よりも若い両親が多いのは当然のことだと認識させられました。学生は、今風の子が多いのですが全般的には真面目な子が多く、学生課長としての立場上ホッとしています。

○ご家族は？

家内と中学生の娘が東京におり、今回が初めての単身赴任です。

○ご趣味は何ですか？

最近、右腕に取り憑いた「五十肩」と仲良く暮らすことです。早く疫病神を取り払って、テニスやバドミントン等いろいろなスポーツに参加したいと思っています。以前は、山歩きが好きで国内の3000m級の山、キリマンジャロ、ヒマラヤ等に行きましたが、10年ほど歩いていないので健康のために史跡巡りのウォーキング程度から始めようかと思っています。

○今後の抱負をお聞かせください。

法人化やJABEEなど、今後、高専が進む岐路を問われる重要な問題に直面しており、その中で自分が果たせる役割を考えていきたいと思っています。

（こばやし　けいじ）
小林　啓二さん
会計課　施設係長

○ご出身はどちらですか？

山口県宇部市の出身です。宇部市の北部で水源地小野湖の近くです。最近は蛍が多く飛び交うようになってきました。

○本校にこられる前はどちらに？

広島大学施設部に３年７ヶ月勤務していました。主に病院地区の病棟新営工事を担当していました。

○徳山高専の印象は？

今までの勤務が大学でしたので、周りは大学生・修士課程の学生さんでしたが、高専は高校生からの課程ですので、未だに戸惑っています。徳山高専＝ロボコンという印象がとても大きいです。全国大会でも優勝していますし、知名度も高いと思っています。

○ご家族は？

妻と子供一人の三人家族で、今年４月に東広島市（西条）から徳山へ引っ越してきました。

○ご趣味は何ですか？

特に何もありませんが、田舎へ帰ると星がきれいに見えると思い、天体望遠鏡を買ったのですが、週末に帰ると天気が悪くて活躍していません。最近の趣味といえばこれぐらいしかありません。

○　今後の抱負をお聞かせください。

高専の勤務は初めてですが、少しでも高専のお役に立てるよう頑張りたいと思っています。

（おかだ　えいぞう）
岡田　栄三さん
学生課　教務係主任

○ご出身はどちらですか？

豊浦郡菊川町の出身で、現在は宇部市二俣瀬に住んでいます。二俣瀬には休耕田を利用して作られた「里山ビオトープ」とそれにつながる「昭和山遊ロード」があります。ビオトープにはシンボルとなる直径５mの大水車を中心に小川やため池などがあり、色々な生物や植物が生息しています。小川やため池は中に入って遊ぶことができ、その生物たちに触れることができます。遊ロードは１周約２kmで色々な動植物に出会うことができます。いいところですので、機会がありましたら是非行って見てください。

○本校にこられる前はどちらに？

山口大学農学部学務係で主に入学試験や留学生、時間割などを担当していました。

○徳山高専の印象は？

自然に恵まれており、教育の場として、とても良い環境であると思います。また、徳山高専では学生の自発性を引き出す教育など新しい技術者を養成するための取り組みが積極的に行われており、

とても活気があると感じています。

○ご家族は？

妻と小学生の子供２人、そして母と祖母の６人で暮らしています。

○ご趣味は何ですか？

宇部地区山大職員の軟式野球部に入っています。ヘタクソなのでベンチにいることが多いですが、代打の切札として活躍中（？）です。

○今後の抱負をお聞かせください。

色々とご迷惑をおかけすると思いますが、早く職場に慣れ、徳山高専の戦力になれるよう頑張りたいと思いますので、よろしくお願いします。

（うしろね　ゆかり）

後根由香里さん

会計課　施設係

○ご出身はどちらですか？

山口県長門市仙崎の出身です。海ばっかりのところですが、とりあえず観光地で遊覧船があるんですが、ものすごく近くに住んでいながらまだ乗ったことがありません。

○本校にこられる前はどちらに？

広島大学施設部にて、国立学校施設の設計・管理の建築関係を担当していました。

○徳山高専の印象は？

第一印象はまず高専に来るまでの坂道ですかね。あの坂にはびっくりしました。その他は緑が多く、環境のいいところだと思います。

○ご趣味は何ですか？

趣味はバドミントンで、５年前に始めたら思いっきりはまってしまって、今も昼休みに頑張ってます。しかし、イメージと体のギャップが大きくて思うように動けてないので、なんとかうまくならないものかと毎日悩み中です。

○今後の抱負をお聞かせください。

施設係では慣れない分野もやるので、いろいろとご迷惑をおかけするかと思いますが、少しでも早く慣れるよう頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。

（いたや　としなり）

板谷　年也さん

学生課　実習係

○　ご出身はどちらですか？

三重県松阪市出身です。三重県の中部に位置し、松坂牛で有名な所です。また、古事記伝を記した本居宣長の生誕地でもあります。

○本校にこられる前はどちらに？

鈴鹿工業高等専門学校の専攻科で、電子機械工学専攻の学生でした。鈴鹿の専攻科生は様々な年齢の人がいて大変勉強になりました。

○徳山高専の印象は？

鈴鹿高専では学生は地元出身者が少なく、半数以上は寮生でしたが、その点、徳山高専は地元出身者が多数在籍しており地元とのつながりというものを感じました。

○今後の抱負をお聞かせください。

みなさんとは、あまり接する機会はありませんが、私なりに少しでも徳山高専のお役に立てるよう頑張りたいと考えております。

（まつお　ようこ）

松尾　葉子さん

学生課学生係看護師

（松尾葉子さんの紹介は、本誌27ページに特設記事を設けていますので、そちらをご覧ください）。

トピックス

●教職員研修会が開催されました

３月11日(月)　宮城高専校長　四ツ柳隆夫先生の講演がありました。演題は「高専が抱える課題と将来のあり方について」でした。

●第24回卒業式が挙行されました

３月15日(金)、第24回卒業式、第６回専攻科修了式生が挙行されました。本科生137名（ME42、IE49、CA49)、専攻科生16名が本校を巣立っていきました。

●第29回入学式および第８回専攻科入学式が行われました

４月８日(月)、新入生123名（ME42、IE41、CA40)、編入生５名、留学生２名および専攻科生16名の入学が許可されました。

●新入生歓迎クラスマッチ

６月19日(水)、雨天のため延期になっていた「新入生歓迎クラスマッチ」が行われました。総合優勝は土木建築工学科３年生でした。

●第38回中国地区高専体育大会

７月19日(金)～21日(日)、第38回中国地区高専大会が米子高専を担当校、松江高専を協力校として開催されました。本校は、バレーボール競技で団体優勝しました。

●高等学校野球選手権大会中国地区大会

７月21日(日)、22日(月)、24日(水)、高等学校野球選手権大会中国地区大会において、久賀高校、徳山工業高校、防府高校と対戦し、ベスト16に進出しました。

●チャレンジショップがオープンしました

７月27日(土)、徳山商工会議所の街づくりの一環として、徳山市銀座旧サティ２階に「チャレンジショップとくやま」が設けられ、本校も、「高専夢広場」として参画し、各学科や学生会の企画が展示されています（企画の予定は、本校のホームページにも掲載されています)。

●第37回全国高専体育大会

８月８日(木)～12日(月)、第37回全国高専体育大会が一関高専担当校とし、仙台電波、鶴岡高専、福島高専開催校として行われました。本校は、卓球ダブルス（宮根明日香さんと松永知子さん）は優勝、バレーボール競技は準優勝しました。

●校内見学会

８月22日(木)、中学生を対象とした校内見学会が行われました。今年は各学科の催物の他に、研究室紹介がありました。中学生と保護者、先生合わせて411名（生徒304、先生28、保護者79）の見学がありました。

●「公開講座」が開催されました

• ７／22(月)、23(火)、25(木)、26(金)：
徳山市立小学校パソコン研修会　（三木　幸）

• ７／27(土)：電子工作はじめの一歩：ＰＩＣを使った電子時計キット工作（百田正広、神田徳夫、山田健仁、寺西　信）

• ７／27(土)：エクセルが使えたよ！：
（池田信彦、原田徳彦、山本孝子）

• ７／29(月）～7／30(火)：わくわく・どきどき超簡単手り　ホームページ（初級編)：(桑嶋啓治、島袋　淳、工藤洋三)

• ８／１(木)～８／２(金)：Visual　Basicによる Windowsプログラミング（初級)：(工藤洋三)

• ８／３(土)：体験！マイコン制御：
（守川和夫、新田貴之、寺西　信)

• ８／５(月)～８／６(火)：わくわく・どきどき手作りホームページ(中級編)：(桑嶋啓治、島袋淳、工藤洋三)

• ８／16(金)～８／17(土)：きょうは一日大工さん：（原　隆)

• ８／18(日)：徳山サテライトカレッジキッズ学習講座夏休み小学生「電子工作」体験教室
ー音の鳴る電子楽器の製作ー（大西厳、山田英巳、中村金良）

• ８／19(月)：水の流れ、空気の流れの不思議を探る：(渡辺勝利)

• ８／19(月）～８／20(火)：ACCESSによるデータベースの構築：(江口賢和、義永常宏)

• ８／26(月）～８／27(火)：Visual　Basicによる Windowsプログラミング（中級)：(工藤洋三)

（本文中、敬称を一部省略しましたことをお断りします）

おめでとうございます

●原田徳彦先生（情報電子工学科）

「Study on PML absorbing boundary conditions for a triangular cell time-domain method」（三角形セルを用いた時間領域法におけるPML吸収境界条件に関する研究）により、平成14年３月11日、山口大学より、博士（工学）の称号を授与されました。

●熊野稔先生（土木建築工学科）

「ポケットパークの計画と管理に関する研究」により、平成14年３月25日、長岡技術科学大学より、博士（工学）の称号を授与されました。

アングル

入学生宣誓

教官研究集会
宮城高専校長　四ツ柳隆夫先生の講演

１年生の写真撮影

顧問会議

徳山市野球場での
本校チアガール

8月22日の
校内見学会への参加者

編集後記

広報委員会は「学校要覧」、「学校案内」、「高専だより」、「ホームページ」を担当しており、徳山高専の活動を広く発信するのが主な仕事です。

私も３年ぶりに広報委員長に返り咲き、新たな気持ちで編集をしました。特に、今年度から、今までＢ５判であった「学校案内」と「高専だより」を、Ａ４判にすることにしました。単に紙面を大きくするだけではなく、この際、イメージを一新することにしました。長年に渡り引き継がれてきた形式を打ち破り、新たなイメージを作り上げるのはなかなか難しいことです。

３年前と違い、デジカメの進歩により、フイルムを使った写真を使わなくて済むようになりました。撮った写真をその場で見ることができ、また、編集もこれらを挿入するだけで原稿を仕上げることができます。この他、カラーのインクジェットプリンターの性能も大変よくなり、原稿の仕上がり具合をチェックするのが容易になりました。原稿は全て電子ファイルにして印刷業者に渡しています。技術の進歩の早さを感じます。

高専だより55号について

新しい校長を迎え、校長の紹介と、どのような方針で学校を運営していくのかを、「校長インタビュー」と「フレッシュ座談会」で明らかにしました。

今年の夏の出来事はなんと言っても「高専夢広場」と「高校野球」でしょう。校長が起案された「高専夢広場」の活動を急遽追加しました。また、高校野球は３回戦まで勝ち進みました。若者が一生懸命にプレーしたり、応援したりする姿を見ると胸が熱くなります。応援風景を表紙に使いました。他の高校のようなチアガールのユニホームがあると、よりそれらしい写真になると思います。

また、今年度から始めた「オーストラリアでの一ヶ月に渡る語学研修」について、後に続く学生諸君の参考にするために、感想文を掲載しました。

この他、編集して感じることは、学生諸君の作文能力が非常に高いことです。ほとんど筆を加えることなく、原文で掲載しています。

雑感

春から三つの冊子を連日編集してきました。これらに忙殺され、特に卒研をじっくり指導したりする余裕がなくなりました。最近教官も色々とすることが多く、一見忙しくよく働いているように見えるかもしれませんが、私自身大した成果が残せていないような気がします。何にでも手を出すのではなく、少ないものにじっくりと取り組む静けさが必要ではないかと思います。夏休みもあと一週間を残すだけとなりましたが、野球の応援や夢広場にも行ったし、学生と桃狩りや編集もしたし、まあ今年の夏休みはこれでよしとしましょう。

編集責任者　　重安　邦之

平成14年度広報委員会名簿

委員長	情報電子工学科教授	重安邦之
	一般科目講師	長廣恭子
	機械電気工学科教授	前園一郎
	情報電子工学科助手	原田徳彦
	土木建築工学科教授	大成博文
	庶務課長	上甲克和
	学生課長	山岸　正

徳山工業高等専門学校

Tokuyama College of Technology

徳山高専だより No.55

発　行　広報委員会

所在地　〒745-8585 山口県徳山市久米高城3538

T E L　(0834)-29-6200(代表)

印　刷　大村印刷(株)

発行日　2002年(平成14年)9月26日

U R L　http://www.tokuyama.ac.jp/